

麻生路郎主筆

川柳雜誌

七月號



川柳雜誌 第十一卷第七號 目次

題字 麻生路郎
表紙 食瀧南北

文苑

武玉川二篇研究(三)

梅本秋の屋
森東魚(三)
蛭子省二

不朽洞句稿 麻生路郎(一)
近作 柳樽 麻生路郎選(四)

股引を送る

小林不浪人(三)

川柳塔 麻生路郎選(四)

月金・銀・鐵

西田新艸樂
胡田山水(三)
福田山雨樓

粒々集 柳秀五健(九)
日本名所名物川柳(大阪の卷)

古狸窟雜筆

梅本摩山(吳)

「橋、文樂座」 麻生路郎選(五)

人魚 回春

石曾根民郎(言)

一路集 團扇 阿部羽生選(三八)

東京の登音

住田亂耽(四)

本社六月例會 喜多春秋共選(三)
禿山 記(四)

白井梅里君を偲ぶ

生田翠夢(四)

各地 柳壇 路郎、綠雨、整理(四九)

「助け舟」の句

安川久流美(三)

川柳書架 (六〇)

川柳バイロット欄

福田山雨樓(四三)

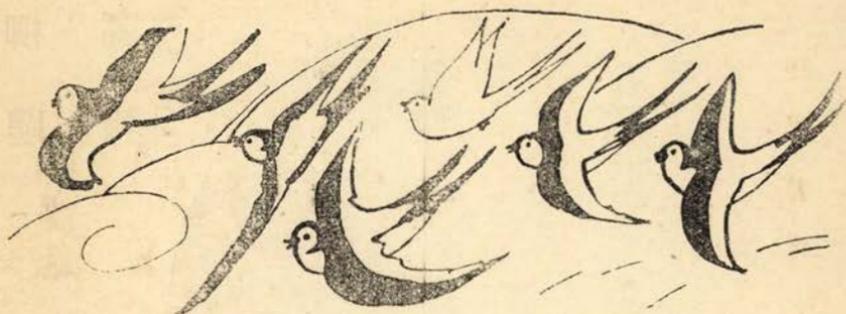
川柳家戸籍調 係・山雨樓(三八)

柳壇畫報

……………(三)

編輯の窓 山雨樓(六一)

西之町MEMO 綠雨(六三)



不朽洞句稿

麻生路郎

金のことを忘れて心太を喰ふ
株と女樵悴として四十二
大阪の屋根へすてるも戀の嘘
まだ貯める氣かと家主へ聞いておけ
翠夢君の新婚を祝して

今朝からは二人でつかふ齒磨粉
柳路夫妻カフェー開業を祝して

目指す灯となるもうれしい君が店
悼綠雨夫人

時計がとまつた淋しさですよ僕等にも

柳 壇
畫 報



本誌編輯局同人に推選
された西田神樂君

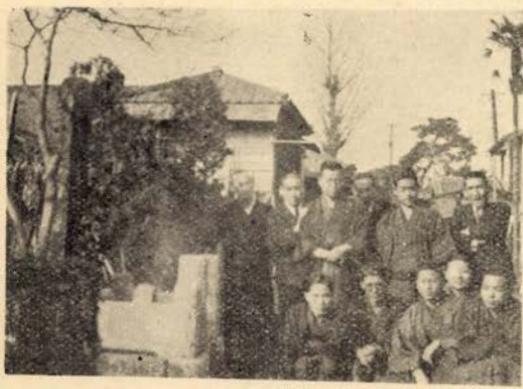


本誌編輯局同人に推選された西田神樂君
（右六月五号 三九一）君達の紅が日入五列後、踏光が日入六列中、部分が端左



川京百派記念大

「京」百派記念大會(一九三九)會大念記被百の「京」
 (て於に館會政民用屋本市都京日六)



館之坊の裏前にて一柳友會一同 並列左から〇丸 昭三味、
 陣 从、唐好、黎明、すずか、前列左から 臨精、國六、花照坊、芽
 柳、柳行兒の計君一九三四年三月四日東京四谷萬念寺に於
 て撮影



(町江父祖孫御覽)會まちへ
 氏風清田松央中、會迎款伯墨風書の



近作柳樽

路郎選

竿竹の音も聞ええる安カフエ
 病床へ前金切れの講義録
 込み入つた話氷の匙うごき

丁氏知邊にて中風を起す

迎へに來たら病人の高軒
 曉の寒さ國防婦人会
 騒音の中に銅像たてられる
 あこがれの文士競馬にこつてゐる
 月曜日出世しそうにない自分
 嗜み切れぬ鳥貝世辭を聞流し
 藥宴へ鷄來る貨物専用線
 轉勤の机胃散の罐を捨て
 放蕩の味覺よふけの屋臺酢

大坂

大 門

神戸

同 九 葉

同

同 同 同 某 同 同 同 同 人

同 同 同 同 同 同 同 同 同



夜行汽車何か悲痛な氣配がし
 情炎の渦吸ひさうに塗り枕
 あけすけに言ふ姐えはんの腫がうるみ
 相談の耳打ち顔は貸しておき
 それ見ると無情な顔でつんのける
 規則書へ母のみこんだ顔で居る
 目覺しも所詮搾取の立場なり
 酒飲まぬ腑甲斐を櫻嗤ふやう
 久し振りしんみり不況へ觸れてゐる
 にごりなき假名出頭をせよといふ
 待つ人があつて映畫に肩が凝り
 そのまんま眠る程度のものおもひ
 病室の監視もすごい顔になり
 更生の前へトンボが飛んで來る
 腰掛けし籐椅子の足折れてゐる
 薬の紙で鶴を折るさびしい日
 黙禱へ山の松葉が散るばかり
 夜の水薬が咽喉へしみ腹へしみ

松江

神戸

長野

高知

豊ヶ池

京都

喋 郎
 同
 同
 同 吉 左 右
 同
 同 柳 兒
 同
 同
 同 青 雨
 同
 同
 同
 同
 同 白 蝶
 同
 同
 同
 同 晨 一 朗
 同
 同



衆人の前で一錢投げてやり
職工になるに國語の算術の
肩書があつて名前を出したが
古疵にふれて夜櫻歸つて來

松江市公會堂落成記念演藝の稽古(二)

がんばつてくれろとお師匠さんの腫
新緑へ聲がもげそう撥の手も
故寒子におくる

砂とあそばさば砂のおとまでさびしまる
うつゝでも金などおちてあるなかれ
蔭に來て石のまるみをなつかしむ
日曜を働いてゐる果報者
冷えすぎたコーヒへ氣まづく別れてき
ふと見れば俺にからんだ眼あり

醍醐花見

醍醐寺の佛へ婆娑の流行歌
腕まくらりヨツヤ一つをもてあまし
苦勞さしせられる子供の抱き重り

八

松江

壺ヶ池

大坂

兵庫

十七八

雜千代

同同

噴兒

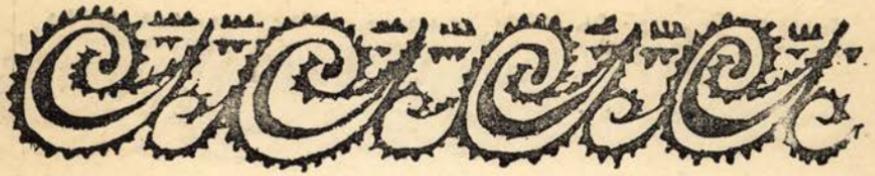
同同

清美

同同

天秋

同同



童心を叩く五月の日に坐り
 ちよこなんと又うなづいて獨り酌ぎ
 夜は星の光の下に立ちつくす
 負けたんだ愚寵の頬が濡れてゐた
 妾の子拾圓札で釣りを取り
 賣れ残りさげて歸つて喜ばれ
 貴公子然として床屋の助であり
 腹の子の話女はむきになり
 花活けて生活線に異常なし
 氣短い伯父なり勝手口に来る
 慣れ切つて晝の電車を乗り違へ
 行樂の終りを雨がせき立てる
 注射針親戚みんな眼をつむり
 新緑へししばし思想を忘れたり
 ちぎれ雲やつぱり俺は淋しいよ
 箏のけいこにヒステリックなお嬢さん
 晝休み街のにはひを嗅ぎに出る
 沸る湯の音の親しき深夜業

千早田

登ヶ池

大和

大阪

高知

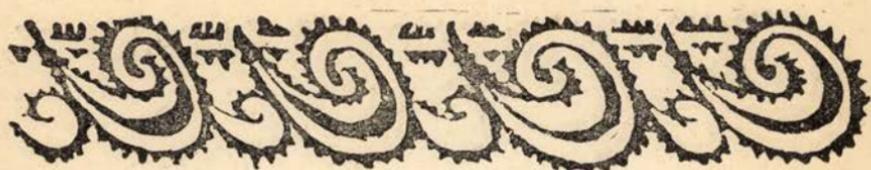
大坂

金澤

松江

東京

同 薰 同 祥 同 今 同 素 同 珍 同 利 同 翠 同 愚 同 沐
 舟 月 雨 月 景 生 峯 寵 天



山中温泉湯治吟行

霜雪の橋へかゝつて芝居めき
 獅子の戀餘りに利那主義に出来
 笥にふとほゝ笑が湧いてきた
 妹のたよりへ鼻がつまつてき
 團參の探し會ふたる聲となり
 御詠歌の端で欠伸をかんでる
 大望をもつて市電の乗心地
 束縛をはなれた肩にぬれタヲル

路那先生を迎へて

人間にこんなうれしい時がある
 生活はゆるく腰をおろすとこ
 生ビール掛取二人氣が合つて
 自殺した男が地圖を持つてゐた
 鯉のぼり上げて出勤靴をはき
 履歴書を書く窓へ来る春の風
 アパートは塗りがへられて儲けてる
 注射嫌ひで奥さんのまだ癒えず

加賀

義風子

盛ヶ池

同 縷紅

大飯

同 栗

高知

同 梨生

今治

同 小松

桑名

同 丁坊

京都

同 正祐

盛ヶ池

同 巷巴

同



ハイヒール誰れを待つのか足を組み
 金魚賣り禪のまゝで値切られる
 ありつゝいた職も臨時といふ名義
 待たさるゝ身に不甲斐なさ少しあり
 考へて見れば泪のあはて者
 宿命の涙へ塗つて塗つて出る
 まるあられ轉がされてる風の煤
 満月へ天鷲絨色の猫が出る
 沈黙の話題を沖の帆に向ける
 病んでゐる春を林檎の艶に泣け
 戀しては金にならない女給です
 眼の色を窺ふことも犬に似て
 メイデーの旗手いつぞやの辯士なり
 にんにくも松葉も飲めど拾二貫
 我が妻を見直すほどの金が出来
 嬉しき客の大の健啖
 風呂場の大鏡に映る白いさかな
 行けるとこ迄行くと云ふ女氣の

大阪

神戸

愛媛

松江

高知

埼玉

大阪

同

神戸

たけを

同

明坊

同

宵明

同

耕一路

同

映珠

同

いぬ三

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

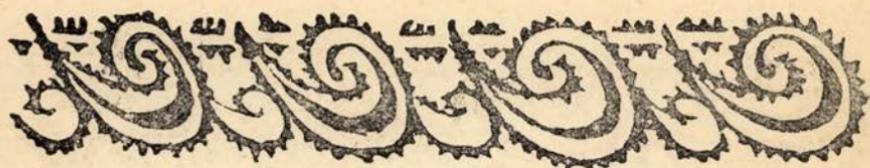
同

同

同

同

同



生活へあすこも目の出拜んでる
 ひよつとした油断へお辭儀されてゐた
 不恰格のモデルの様に酔ふ女
 曉の事件 雛を猫が盗り
 南 京 虫か と 見れば 蕎麥粕
 床すれをなでてやつぱり故郷のこと
 心までゆるせば女にある 涙
 思ふことありてか女の眉せまく
 待たされる男の不覺欠伸する
 鏡臺に僕のチツクが立つてゐる
 家出した机チユーリツプが眞赤
 金貸して出會頭にそむかれる
 追風にたつてる 啞の無表情
 —親友の家で—
 敏もつた少女があるへ窓をあけ
 淋しさを小鳥のやうに鳴けたなら
 淋しさを雀が一羽濡れてゐる
 春の電車遊ぶブランを立てゝくれ

今治

五所

京

同 丁路

龍ヶ橋

同 浮鬼

大板

同 花涙

間

同 寒草

今治

同 紫陽

松江

同 喜代子

釜ヶ池

同 志津女

神戸

朝雨



眞夜中を働く人のある汽笛
 葱のはしあめんぼついで流れたり
 温む水いもりそろく底を行き
 石灰にせんいの解けしたなごゝろ
 またをんなを想へば葉蘭がゆれてゐる
 趣味と云へば講談本を見せられる
 給料日頂く癖をさげすまれ
 新緑の杉の梢の避雷針
 エンゲージリングへ怖い父の株
 風鈴の下得心の寢息で居
 ニコチンに焼けた指見て意見聞く
 肩巾に中心がないハイヒール
 陰ながら愛してたのが口惜しく
 利にさとい男の指のまむし指
 謝まればいつそ氣まづいことになり
 ふりかへる山は故郷へつゞくなり

四國川柳大會

まつてゐた今日は大空花曇り

今治

同
 バット

松江

同
 梟人

兵庫

同
 新

高知

同
 青果

大阪

同
 たてみち

今治

同
 清春

神戸

同
 規堂

今治

同
 小樓

同



ドラが鳴る港へ煙の煤が浮き
ある友人の結婚生活

夫獨りの御機嫌とりに疲れてる
溜息のいつそ淋しい灯の暗さ
荒れた手へ白粉つけて嫁入りし
生活に何時か個性と云ふが涸れ
入學兒二三頁はそらで讀み
一手品のこして器具師は賣り初め
洗ひ髮梳きく道を教へくれ
社長だと云へば飛びつくかと思ひ
パンを得る爲の三味線とも見えす
春雨にへどのうどんが浮いてゐる
東京がなんだ俺には畑がある
豊繁期雨と云つても休まれず
アスピリン効いたがまたも引き直し
北濱で帽子被^ててるはお客なり
ニア人になつて話題に突き當る
製材所今釘ひいた凄い音

名古屋

京都

名古屋

河内

今治

大阪

同

石川

大阪

神戸

大阪

名古屋

加賀

高松

大阪

豊姫

大阪

嵩喜固高

白英

甲甲

天馬

史郎

石流子

美代坊

醉羊

菊路

好啓兒

靜波

上上

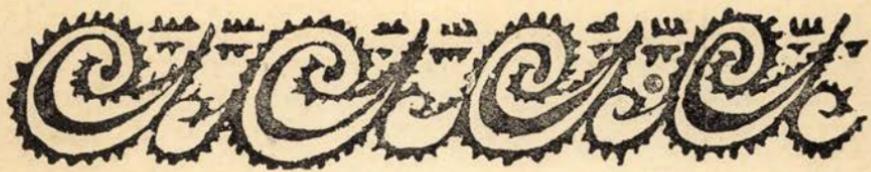
雲龍子

柳夢

牧人

孤鶴

臯山



カフエーにて

漫 畫 にも 書 きた い 様 な 顔 並 び
 新 開 地 ら し い 巡 査 の 國 な ま り
 粉 炭 の 拂 三 助 持 つ て 行 き
 春 の 雨 話 の 末 は 酒 と な り
 重 役 と し て の デ ス ク に 艶 が あ り
 太 陽 は 眞 上 や ま し い 氣 を 捨 て よ
 子 が 出 來 て 夫 へ は す か し い 醫
 金 一 買 い ま す と 鮮 人 が 遣 入 つ て 來
 捨 て ら れ た 下 駄 う つ む い た ま 流 れ
 心 圓 の 底 に 靜 か な 深 い 沼 が あ る
 喰 ふ 時 を 思 ひ 西 瓜 の 種 を ま き
 ま じ め さ へ 妹 ま で が か ら こ う て
 古 傷 の 痕 あ の 時 の 泣 い た こ と
 ひ と ご ろ し お と 々 し あ つ た ま 空 家
 三 味 線 の 玩 具 鮮 人 買 つ て く る
 子 の 顔 の 笑 顔 一 と こ 僕 の 顔

石川	登米池	西宮	愛媛	神戸	京都	名古屋	今治	金澤	大阪	清水池	大阪	松江	大阪	同	同
清	一	三	世	三	貴	長	蛇	綠	以	御	里	洋	雨	清	淵
更	吉	象	櫻	志	樂	助	水	女	子	美	二	三	也	次	



武玉川二篇研究 (三)

梅 本 秋 の 屋
 森 子 東 省 魚 二

(61) 光に毛抜もありかたき物

省 二 道具はなくてはならぬもの、各々の使命をもつて居る毛抜でなくては便利に尖はとれぬ。(若し此毛抜で採つてくれるのが、思ふ人であつたなら、一層ありがたき物ならむ)

秋の屋 或時は毛抜も戀の道具に使用されるが、此句には其意は無いやうである。

東 魚 思へば簡單極まる道具だが、さて役に立つものである——と現代人でも有難く思ふであらう。

(62) うそかかうして上下て来る

省 二 四月馬鹿にも、随分極端なのがある。

秋の屋 人を瘡ぐならば、此處まで来なければ面白味が無い

東 魚 軽い句であるが、前句によつて其場合を想像する範圍が略定まつてくる、これ丈では一寸想像しかねるやうに思ふ。

(63) 薙にあつひきまゐるの打違

秋の屋 煙管の打違とは、朝顔を見にきた人同士が、煙管

の火を付け合ふ。とてもいふの敷。

東 魚 此頃入谷の朝顔のやうに、公衆にみせる處があつたのであらうか。目覺に床の中から、庭の朝顔をみる、煙草盆の火入れて、双方から煙草の火をつけ合ふ。朝の闇の情景ではなからうかと思ふ。

省 二 場合を明かにする事は聊か困難か。入谷の様な場所ではなく、素人の朝顔作りを觀に來た客同士にて耳ならむ。

秋の屋 此の句の出來た時代に、入谷の朝顔園といふものなく、素人が多く作つては、他人に見せたのみである。

東 魚 私も入谷のやうな處は無かつたらうと思つたので、秋翁説がはつきり呑込めなかつたのであるが、何程素人の家でも差支ないわけである。ケイ二十四に「罌壘ませる薙の客」を發見して、成程と合點がいつた。

(64) おとりを押をはいる蓬生

秋の屋 小鳥などを捕るのに、罌を出して置いて、自分は蓬生すなはち草叢に隠れるのである。

東 魚 「おとり」は罌にしても、踊(濁點あるもの)にみて)

してせ、をが正しいらしい。「押して」といふ所爲が、どうする
のか判然しない。多分前説の如き場合であらうと思はれる。

省 二「押して」は突きやつて置ての謂か。

(65) たいこの年の星をさゝれる

省 二「いや旦那様は千里眼で、などと御祝儀頂戴。

秋の屋「たとひ年の數が當らすとも、星をさされた風をして
「どうも恐入りやした」などと、客の機嫌をとるのである。

東 魚「輕妙。

(66) 間捨にしてはおかれぬ梓弓

省 二「今日でも類した行爲をする徒はあるが、一幽靈のこ
は色つかひ弓を持ち」で、間捨てならぬ様な事を喋りたて、却
て風波を起したりする。「よせられて唾の口利く梓弓」(二十七)

「後添はひや／＼思ふ梓弓」。

秋の屋「昔の市子の口寄といふものは、家内に風波を起させ
るやうな事が、往々あつたらうと思はれへ。

東 魚「飛んでもない事を云だされては、全く捨て置かれぬ
面白い句である。

(67) おとこのほしい勢田の眞中

秋の屋「勢田の橋下に住む龍女が、三上山の蜈蚣に惱まされて
男の手を借りたく思ふので、其處へ藤原秀郷がその選に當つた
のである。

東 魚「長橋の中程に来て、さて前後を見るとさと無氣味で
力強い男の連れが欲しいと云ふ、女らしい心持ちを云つた丈け
ではあるまいか。

省 二「眞ん中」が、いかにも勢田長橋の感を與えス。歴史
吟ではなからう。

(68) 蜘蛛の巢きりて戻る賣屋

秋の屋「長く賣店の札を貼られた、家屋の中に遣入り、蜘蛛の
巢を切つて間取などをみて、其儘立戻るといふならむ。

東 魚「ひどい蜘蛛の巢だ。大分永らく賣家である、とくと
見る氣もなく戻るといふ、家の古りわびた様を云つたのであら
う。

省 二「蜘蛛の巢に驚いて、間取りなどみどころか、早々に
引戻る。

(69) ふすまを覗く太郎國經

秋の屋「伊勢物語の第六段、業平が藤原高子を連れて、芥川
まで逃行つた時、追手に出て奪返したのが、堀川太郎國經で、
倉庫の奥に二人がかくれてゐる處る、後より覗くといふのであ
る。

東 魚「成程「鬼一口」の件に出てくるのが太郎國經である。
句ではある場合を、太郎國經に見立てて、詠みなしたものであ
らう。

省 二「伊勢物語は、「御兄堀河の大臣、太郎國經の大納言
また下藤にて内へまゐり給ふに、いみじうなく人あるを聞きつ
けて留めてとり返し給うてけり」。古句に「關白が追手にはしる
芥川」と。歴史吟として解してよいと思ふ。(前句の關係に因
つては應用句とする事も出来るが)。

(70) 我たつ柚の知らぬ年號

省 二「深山に入つて居る樵夫には、年號の變つたのも、知
らぬ事はあつたらうと思ふ。(殊に古は御一代一號ではあらせ
られなかつた事もある)。「我たつ柚」は百人一首中にもあれど
「阿耨多羅三藐三菩提の佛たち、我がたつ柚に冥加あらせ給へ」
(傳教大師)が有名。

秋の屋 此の作者は「我たつ袖」といふ語を、普通の袖人として用ひたやうであるが、古來、我たつ袖は、傳教の和歌以來、比叡山の異名のやうに成つた、他の山には用ひられないのである。句意は前解の如くであらう。

東 魚 〓 ケイに「我立つ袖に軍評定」とある。これは秋翁の申される叡山の例句になると思ふ。

(71) 曳たひ袖のみへ罔兩

省 二 〓 初篇に等しい作があつた。影法師ではアラがうつらぬ。曳きたい袖は、随分心をそつ事であらう。

秋の屋 〓 異議なし。

東 魚 〓 同上。

(72) 行燈にまた氣のつかぬ暇乞

省 二 〓 長尻客は電燈が點いても落ちついてゐるものだ。一

女客に話込まれると、此句の様な事はよくある。

秋の屋 〓 屋外はまた明るい故、屋内の行燈に、氣がつかぬのであらう。多辯の女客に相違ない。

東 魚 〓 女客であらう。門へ出かかつて、左様なら五分どころではないのが澤山ある。

(73) 浪人の羽のぬける元日

秋の屋 〓 浪人などの悄然たる態を「尾羽うち枯らす」といふが、特に元日に羽の抜けるは、全く不可解である。

東 魚 〓 「羽のぬける」は、この場合忙然目失してゐる様な、意味合ひではあるまいか。越すに越されぬ大晦日を、越されずに越して、やれ／＼とほつとした處で、全く腑がぬけた態なのであらう。

省 二 〓 元日はお目出度いのであるが、浪人丈けに羽のぬけた様な有様。

(74) 妾の智恵も河竹の風

秋の屋 〓 「風はカゼと訓むのではなく、フウと音讀するのでそれ者の果である妾は、その智恵といつても、大方遊里に行はるる風習で、新しい智恵ではないといふ意であらう。

東 魚 〓 風をカゼと讀みたく私は思ふ。フウではどうも句が落付かぬ様に思ふ。洒落て「河竹のカゼ」と云つて、商賣人の其餘波りだといふ心持ちを表したのであるまいか。

省 二 〓 句意は前二説で盡されて居る。結局「風」は風習の意に用ひられて居る。讀み方はどちらでもよくはなからうか。

(75) 虫の命の燃るあさちふ

秋の屋 〓 淺茅生にすたく螢である。

東 魚 〓 何だか調子が良いので、心ひかれる句である。

省 二 〓 命が燃えろと思へば、一層可憐。

(76) 他人の足に負る鳥邊野

省 二 〓 鳥邊野或は鳥邊山は墓地の謂。京都には鳥邊野と稱し墓所が在る。他人は足早に通り過ぎてしまふが、身内の者は死者への追回に足がにぶる。

秋の屋 〓 葬送の場合に、屢々實見する事である。

東 魚 〓 實情を誰しも受取り得るから救はれて居るが、一寸いや味な感がある。

(77) 雲の行衛の住吉で散る

省 二 〓 住吉の松林を句にしたものは、他篇にも詠まれて居る。雲の行衛が住吉で散るとは、松風との取合せである。

秋の屋 〓 「住吉で散る」とは、此浦の松ふく風のために、行雲が散亂するのであらう。

東 魚 〓 贊。

(78) 嵯峨より深きあみ笠の奥

省 二 嵯峨の奥と編笠の奥と、俱に奥深い感の對照。——
歴史に關係でもありませんか。

秋の屋 歴史には無關係と思ふ。深編笠を被つてゐる人の顔は、廣い嵯峨の奥を見渡すやうで、よく見透がせぬといふ意味であらう。

東 魚 洒落て言つたままであらう。但、嵯峨の奥と云ふと世を忍ぶ人を連想する。深編笠も世を忍ぶ人であらうから、其邊の心持ちも句はしてあるやうに思ふ。

(79) 雉子鳴て震かくと撥を留

秋の屋 三絃を弾いてゐる時に、突然に雉子が鳴いたので、地震が揺るか／＼と、撥の手を停めて、様子伺つて居るのである。實際には地震が揺ると直に、雉子が鳴くもので、私は屢々これを試した事がある。

東 魚 雉子のなく場所と三絃を弾ひてゐる場所とが、どうもしつくり附に落ち兼ねる。撥は太鼓の撥かなどで、山裾の社か何かではあるまいか。

省 二 前句が欲しいが、私は三味線かと解してはゐた。——
鶏も地震を告げると古書に有る。

(80) 鏡にせひてかゝる庭鳥

秋の屋 雄雞に鏡を見せると、他より知らぬ雞が来たかと思ふて、羽を逆立てて飛懸るもので、それを咏んだ句である。

東 魚 鏡をみせるとは、何ういふ場合であらうか。私は社斗り連想するやうだが、淋しい社の神鏡(随分端近な處に鏡のある小社)に放鳥の庭鳥が、我姿を見たやうな場合ではあるまいか。(縁などへ上つたと考へて)或は軍鶏の鬨性を煽るために、鏡を見せるやうな事をするものか、如何であらう。

省 二 鬨性への刺戟だと解するのだが、文献の手がかりがない。

(81) けふ九重を裸にて立

秋の屋 昔の大山石尊参りではない歟。亦、身代が不如意となり、裸一貫にて逃亡する人とも解せられる。

東 魚 どうも難解で降参した。玉藻の前が狐の正體でげろのかなど想像してみるのが、それにしては「立」がいやに落ちつてきこえるから變だし。

省 二 島原の女に金を費ひ果して、裸で歸郷するのではなさや。

秋の屋 前説の如くならば、江戸つ子の上方見物に、旅費を使ひ果して、すこ／＼歸東する状態である。

(82) 入墨を消す氣に成れば夜か明

省 二 傾城の腕の逆修「命。「い、施主がついて命を火葬にし」。その決心になつた時分、夜が明けるとは迂餘曲節、手練手管の妙極。

秋の屋 洒落本によく有る常套手段である。
東 魚 異議なし。

(38) 紅裏のないも笑止な土用干

省 二 拙家の土用干は此種、見ぬ顔に惚れさせる罪は侵さぬ。「土用干げにや女の罪重者(吟紅)」。

秋の屋 「見ぬ顔にはれる質屋の土用干」の反對。
東 魚 全く吾々の様な、古洋服の土用干では興趣がない。

(84) 心ある酒とはしらぬ從弟問

省 二 人生の花だ。從弟妹同志は鴨の味。「來た晩にものを言ふ家いとこなり」
秋の屋 表には知らぬ顔でも、裏では知つて居るはずである

東 魚 〓 「間」はナカと讀ませるのであらう。

(85) 三人傘にうたかいはなし

省 二 〓 相合傘は兎角疑ひの目でみられる。三人傘では大丈夫。(然し三角關係が流行するとネ呵々)

秋の屋 〓 三人傘などは、實際に無理である。

東 魚 〓 國芳の有名な藏前の夕立の繪は、職人が三人一つ傘に入つてゐるのであつたかと思ふ。兎に角單に軽い洒落とみるべきであらう。

(86) 様と云ふ名て來る時は忍ぶ紳

秋の屋 〓 忍ぶ戀ならば、様といふよりも、さんといつた方が親し味があると思ふ。何々様といふと表向きになる。

東 魚 〓 明かに何々様と云はずに、單に「様」だけで分る。つまり、あの方、彼氏と云つた意味で、只今あちらがおみえになりましたなどと、萬事飲込んな待合の女中さんなどがあるものだ。

省 二 〓 「様」によく似た、何んとか云ふ唄があつた。「様」で通ずるところ、嬉れし。

(87) 神風に吹消れたるもみちの火

秋の屋 〓 詠史句かと思ふが、今、遽に思ひ出せぬ。神苑に紅葉を焚いてゐる處を、風に吹消されたといふ而已ではなからう

東 魚 〓 解らぬ。
省 二 〓 ？

(88) 吾妻くたりの青いからかさ

秋の屋 〓 在五中將の東下りの繪に、馬上の業平の後より、長柄の傘を差懸けてゐる圖がある。

東 魚 〓 何となく明るい感じがされる。
省 二 〓 「青い」が應はしい感じがする。

(89) 不沙汰の顔に合面かなし

省 二 〓 單なる御不沙汰ではない。金の借り放しとか、何にかの不始末での「面かなし」である。

秋の屋 〓 夕立に逢つても、傘を借る事が出来ぬ。

東 魚 〓 「合ふメンがなし」と讀むのであらう。面ンを被つて伺ひましたとも云ひ兼ねる程の不義理があるのである。

(90) つまみ洗ひの手を振て置

省 二 〓 下七いかにも、つまみ洗ひを表示して居る。

秋の屋 〓 世話女房が、子供の着物の裾でも洗ふのであらう。
東 魚 〓 つまみ洗は日常用ふる言葉であるが、要を得た巧い言葉だと思ふ。

(91) あり甲斐なしの笙吹の鼻

省 二 〓 笙吹の類詠はあるが、皆あり甲斐なしの鼻によまれて居るのは、笙吹をみれば直に判る。

秋の屋 〓 笙をふく時には、笛や箏とは違ひ、鼻が全く隠れる故、有り甲斐なしと詠んだものである。

東 魚 〓 奇抜で然かもクスグリ味がなく、朗かなところが私は好きだ。

(92) 陰間の聲の二筋にたつ

省 二 〓 二様に使ひわけける。男客相手と女客相手で。
秋の屋 〓 前後に據つて、其聲が異なる。

東 魚 〓 これも奇抜な言ひ方をしたものだ。巧い云ひ表はし方をするものだと思ふ。

(93) 四十二の子の親か澤山

省 二 〓 「四十二は筒にせまらぬみかん籠で、迷信により一度棄てられる。四十二の二ツ子は親を食ひ殺すといふ、即ち四

十一で産むと、翌年子供が二歳となる、四二(死)四四(死)死に
通すと云ふのであるが、女の子であつたら、家繁昌とも言はる
秋の屋二「親が澤山」は誇大に過る。多くても四人である。
東 魚二二人が四人になれば十割増だから、澤山と思へば思
はれる。呵々。

(94) ほととぎす皆出来合の葵也 けり

東 魚二時鳥の鳴きをめる頃は青葉で、秋の紅葉の時の様に
特に取立てゝいふべき、山の景色ではないとの意かと思ふ。秋
は山粧ふと云ふから、言はば人なら青葉の山は平常着で、紅葉
の山はよそ行の贗着である。

秋の屋二時鳥の啼く頃、ある一種の昆虫が、樹木の嫩葉を管
狀に捲いて巢に作つたのが、森林中などに落ちてゐる。これを
「時鳥の落し文」といふ。それを咏むは句ではないかと思ふ。

省 二二出来合は、いつもの謂、青葉の事に解して、「手分
して青葉を出るか鶺鴒(風國)と云ふ様にとつてゐる。

(95) 三味線の跡を因果と引かふり

東 魚二踊子との交渉が進展しすぎて、えらい負擔になつた
のではないか。

秋の屋二三絃が枕に代用されると、其後の始末が容易でなか
らう。

省 二二因果應報。その位の心算はあるべき筈なのだが。

(96) 朝みれば御油赤阪の家斗

省 二二晩には出世の巢だワイと思つたのに、朝みれば「家
斗」は巧みだ。街道風景が窺はれる。

東 魚二艶めかしい出女か門に出てゐた夕景とは違つて、平
凡な別に外かと變らぬ家並だけが見える―何だ馬鹿く敷と云
ふ心持ちであらう。

秋の屋二御油赤阪は東海道中でも、出女に有名なる驛である

(97) 宵のうらみの二段目が出る

省 二二二段目なる言葉もイヤ味がない。
東 魚二夜更けて情緒纏綿といふところ。

秋の屋二二段目といふと、淨瑠璃情趣である。

(98) 女房も只取るやうに通り者

東 魚二普通の者なら女房を持つのも、人間一生の大事に考
へるのだが、通り者などと云はれる連中だから、猫の子を貰ふ
程にも思はないと云ふのであらう。

秋の屋二朝に娶り夕に去り、舊を送り新を迎へるが、此連中
である。

省 二二「只取るやうに」考えて居るのだから、新陳代謝も行
はるるわけ。

(99) 夏野に家のつまむほと出

東 魚二夏野の草の深く生ひ茂つた中に、藁屋根がわづか見
えるのである。

秋の屋二「つまむ程」といふので、廣野の中の一軒家が想像さ
れる。

省 二二一寸見える景。「順禮の棒許り行く夏野かな」(重頼)
茂つた様であらう。

(100) 降ものとおのれを調ふ板庇

省 二二板庇へ音立てて降るのを技巧的に詠たもので、一例
を示せば謡の「絃上」に、「折からなれや村雨の古屋の軒の板庇
：板屋を敲く雨の音はと盤涉にて候ふ程に、苦にて板屋を聳き
かくし、今こそ一調子になりて候へ」と。

東 魚二「おのれを調ふ」とは、雨なら雨の音、霰なら霰の音
夫々板庇に音立てる事であるとの意であらう。

秋の屋二「絃上」は村雨の音ばかりであるが、此句は前説の如
く、雨、霰、雪等をいふのである。



股引を送る

—旅先から庄萬よし君の留守宅へ—

小林 不浪人

夜來の雨が、また、くづついてゐるに
もせよ、温泉の朝の氣持は、清澄そのも
のである。

此頃、うちでは朝寝をして居れない程
忙し振りをしてゐるのだが、矢張り旅へ
出た氣安さは十時頃まで寢込んでしまつ
た。

それは、大阪の市會議員都市計畫委員
庄健一こと「川柳雜誌」同人庄萬よし君
の札幌までの視察歸り、かねて手紙—
青森驛の連絡待合室でも打合せたが—
電報で打合せて函館市郊外湯の川温泉に
泊り合せた翌朝—六月十三日—のこと
なのである。

話は前夜に戻るが、萬よし君が夕方の
五時頃函館に着いて、龜井晟修君と焼け
残りの鰻屋で飲んで、それから湯の川温
泉で飲んでゐたのである。そこへ僕が夜
の十時の船で馳せ参じたと云ふのが、筋
書の序幕である。

何せ、萬よし君と晟修君は、およそい
ゝ機嫌に酔つ拂つてゐたのであるから、
駈つけつけ三杯位では、とても追ひつけな
い僕である。

翌日の日程を、僕が議長をうけたまは
つて、萬よし君、晟修君、その他大勢
—それは函館と湯の川的美妓連—が

議員の格で、議會もどきで審議したので
ある。多少、議長横暴の氣分があつたが
、ともかく「日程は翌十三日に決定する
ことに保留いたします。御異議がないも
のと認めて左様可決確定いたします。本
日は之にて散會いたします。引續き議員
懇親會に移ります」と云ふことになつた
のである。

さても其の後さるほどに、函館の美妓
富貴子—秋田産の—岡本新内（十四
日V.K.から放送のおさらび）、同じくピ
ン助—松前産—の追分節に、萬よし君
いとも満悦のていたつたこと勿論であ
る。

かくて、飲み疲れの晟修君は歸つた。
そして、萬よし君は酔ひつづれた。取殘
された僕は、まだ飲み足らない顔をして
ゐる秋田嬢こと富貴子と松前嬢ことピン
助と、所謂「對」で別室で飲み直した。

彼女たちは午前二時頃引揚げた。無論
僕も酔ひつづれた。出来事は、その翌朝
—厳密に云へば十三日午前十時頃—
起つたのである。イヤ、もつと前、即ち
午前七時半頃に起つて居つたのを、うつ

かり屋の僕——尤も朝寝のし放題をしてゐるが——それまで知らずにゐたのである。

いゝ氣で温泉に浸つてゐると、いつの間に来たのか、晟修君が大きな聲で「萬よし君が消えてなくなつてゐるぢやないか？今朝の船で歸つたんだとヨ。ひどいなア」と、獨りでべら／＼とまくし立てるのである。流石物に動じないつもりも僕もびつくりした。

あわてゝ、よし君の寝てゐた部屋へ駆つけて見ると、こはそも如何に、そも如何に……晟修君の云つたことは冗談でも何んでもなかつたではないか。まるで化物に面を撫でられたとは此事かと思つた。

そこに書置 ヤ置手紙があつた。急に読んで見ると、ひどい凸凹な走り書で、次ぎの如く書かれてあつた。

慌てもので、ドンキホーテと、併し切り上げのよい萬よし、

朝になつて白河十四日、直江津十五日のコースを考へて断然

七時の通船にきめました。一つは霧のためでもありません。(この印象を出掛れば書きたいとも思ひますが……)

カーさんへ

御好意は子と孫とに傳へます。

コーさんへ

武士は一を聞いて十を知る。これから十年働かう。オツと、君は二十年だつた。

秋田嬢・松前嬢・永遠に函館の名物たれ

午前六時半記

萬よし

これで折角の日程もプランも何もかも

「助け舟」の句

久流美

武玉川二篇の研究(29)の句

○うまい事いふた師走に助け舟

につき三氏は夫々に考證を與へて居られるが、私の考へとしては、該句は單に「亭主」が掛取へ言譯に困るので

オヂヤンになつたので迎酒をたしなみながら何か返報もがたと考へてゐると、亂れ箱の中に萬よし君の股引が穿き忘れられてあつたのを發見した。一大發見である。直に小包郵便にして萬よし君の留守宅へ、差出人を湯の川温泉の一旗亭として出さしたものだ。

後で、えらい濟まんことをしたと氣づいたが、それこそ後の祭りである。晟修君が其の股引を小包で送ることを僕に教唆したか、どうかと云ふことは、僕も武士であるから永久に云はないことにきめてゐるのである。

押込みへ隠れたといふ、古い落語なごにある圖で、それに對しふるな辯の女房がうまいこと言ひ譯をした、所謂「助け舟」とはこの場合、女房の代名詞ではないかと思ふ、只表現に於て缺陷がある句です、上八文字が、押入の中にある亭主の感謝の言葉なのである。



川柳塔

路郎選

朝田新水

一本氣女でなくてそれでよし
退屈な人が古墳の字を眺め
世辭の多さに品物が嫌になり
看護婦のかくし切れない情熱よ
娘まで賣つたが株は下るなり
母と云ふ過去をも包む酌をして
慰勞金故郷へ戻る氣になれず
三人の妾があつて杖をつく
寫真とは違ふ見合の瘦せてゐる
山本丹路

友情にからんで保険とりに来る
サラリーの日割かんぜうなどすまじ

戀の日曜ベツトを二つあけちまひ
子がやがて子の父となるやこしきかな
二千里も離れたやうな手紙かな
たまさかに母の手をひきてれくさし

西田艸樂

誰も詩を作つてくれずばらが散り
心やすう流れ小川の水の夏
救世軍詩の黄昏をぶつこはし
大阪は走る姿と走る音
後家立てる氣でない迄も梳髪で
掛取が去ぬのをレコード待つて居た

生田翠夢

御新婦様とは寫真屋馴れたもの

陰譚初夜のあかりの重々し
新婿へ悪友遠慮もあるのなり
道頓堀新婿だけはほつとかれ
パトロンへ女給は見得もなかりけり

阿部 閑生

寝轉んで語る舊友來りけり
君安んげよ火は火を焼かず
病人の蝶々と遊ぶ根のよさ
我と世と異なる如し菖蒲剪る

福田 山雨樓

山の腹一人で鉄を振つてゐた

宇治柳屋旅館にて

この宿の廣間に和譯大藏經
香爰へ現金主義がこびりつき
母・父・息子 畦で一服

橋本 綠雨

人生の約束かのやうに話される
レコードをかけるにも二人はなれまい

握手にキツスに若き妻にして

岩崎 柳路

帯を解く女給銀貨の音もさせ
コリントへ母も混つた朗かさ

○ 大鶴 喜由

この男ならだませるぞ骨相學
立ち聞けば君の僕のと女學生

大東 郷國葬

いさかしの國からも來て香を焼く
得心をさせて色魔のきれ話
ウルトラの頭の艶と靴の艶
許婚の男をすてゝすがすがし
行末を思ひアイロンこがしたり
雑誌から教えられたる寝白粉

喜多 春秋

女或る日男の吞氣さに呆れ
運のある女に男みんな負け
酒肴佛喜ぶことにして

自 嘲

もう一べんもう一べんと鏡をひき
傘の親切、日記の一善
平民に與へられたる橋の月
名優の舞臺へ棧敷食ひすぎる

石 森 靜 太

春の夜の女の息にうろたへり
指定席女の肩のほそかりき
いさぎよく死んでやろうかとも思ひ
ゆくはるへあばらをなせてゐたりけり
肺をやむことをかくしてどうする氣
死は易きことです藥のんでゐる
痰壺をかへる仕事で老ひてゐる

吉 田 水 車

家持ちになつてお隣越して行き
出勤簿根氣比べのやうに押し
三味線のハタとやみたる春の窓
無遠慮に脚氣のあしをさわらせる

何處もよく似たひき子ゐるなり
女教員眞つ直ぐ歩くくせがあり
江戸みつる

ハルビンの裸踊り

電燈を明かるくすればヒメイあげ
國などは忘れて踊るロシヤの娘
ハルビンで見る外人の娼婦めき

ハルビンのキャバレーにて

乳吸つて踊るが如し日本人

新京にて

ハルビンの便りはエロを書いて出し

大連富士見臺の櫻見物風景

櫻音頭君も踊れと立たされる

毛 利 九 波

情婦に甘んじて黒髪さへ断ちぬ
破滅の自動車と女知らざりき
入道雲晝寝のへその向ふより
愛だけで生きてゆく氣のお嬢さん

詰らない愛のむつごと手と手かな
アパートの引越しフオータブル提げて

長谷川三汀

小成に安んずるもあはれ支店長
レコードがエロサーピスの上で鳴り
借りに行く身にもカラーを替へて出る
苦勞し抜いた腰の細さよ
告白が本當らしい冷たい手
褻揚子啣へて書の刑事部屋

渡邊曉童

一人居てうちの時計はおくれてる
御婦人へ自轉車のベルなりすぎて
人の死をきく顔となりゐる
寢不足を言へば子供をだかされる
夜の壁にタオルの影が死んでゐる

姫田夕鐘

たましひまで俺にまかしてどうする氣
がつちりと四つに組めば儲からず

飲みすぎたとも言へず天氣をけなしとき
その君の押の強さを買ふのです

西村明珠

チューリップ働く留主を咬いてゐる
保険屋は淋びしき事をいふていに
物思ひ暗い所へ來てしまひ
筆先は奮闘努力とは見えす

市場俊食子

利權屋が今朝も早よから顔を出し
夫婦膳はげかけてるに子が出來ず
股ボタンかけくようと顔を見せ
眼帯をかけて日傘が歸つて來

石曾根民郎

大理石おもたい戀をとりもつて
アカシヤの匂ひをこめて無事歸宅
アスファルトのうへに欠伸をおとしてる田舎
ゆふぐれの金齒がにくい感覺美

中澤濁水

遠雷の如く大家は戸をしまひ
氣の浮かぬ女給柳の葉をいちり
借物を損じた詫のくどいこと
釘はづしかけて新刊封を切り

奥野 禿山

面白い浮世と見てる第三者
父に似た娘不幸な日をおくり
魚の目をナイフでけづり生返事
戀愛の凡てを否定せずなりぬ

北川 あや美

祝翠夢氏御結婚

新婿をそのまゝ職業線に立ち
たわむれへ膝ぼしの出た恥かしさ

熊谷 紅

夕刊の前に手料理出来て来る
集金屋箆笥もないと覗いて来

駐在があるなと氣づく藥賣

冬呼改メ

平井 與三郎

ガス自殺鍵の穴へは鍵を指し
洗面器玉の井の夜は明けやすし
観音堂までは財布があつた筈

日野 華水

歩が成つたとこへ電話がかゝつて来
表情の巧い男に歩かされ

首藤 竹楓

名も知らぬ花もなつかし避病院
御籤は末吉女丸い膝

後藤 青兒

トンネルがつゞき煙管の客も居る
出迎に列車の窓が多過ぎる

水谷 鮎美

子ごゝろの怒り人形をすてゝゐる

祝結婚川村觀月君

このごろの雲がうれしい屋根の下

宮岡白峯

國葬の話し立派な集印帳

元帥の話し元氣な男の子

明石柳次

佛の花の見える所で病んでゐる

傳ひ歩きの子ヘインキ壺があり

平井春光

運轉手もののはずみを知る日なり

兄弟の揃つて財布忘れて出

植山九天

それ／＼の訛りで孫ら仲がよし

荒井英賀夫

春雨に足はネオンの方へ向き

粒々集

御影 長崎 柳秀

知しめず行うべしは文の主義

丸髷の一人ホールに目立つなり

なるにしか成らぬ浮世を年で知り

片意地を淋しがられて友が減り

兵兒帯の娘十五のあどけなき

一トときの逢う瀬に長い日を重ね

さからうた顔は我が子と思われず

松山 前田 五健

審判が問ひさうに寄る押さへ込み

巴投閃めくと見て空を切り

叩くのが親切と言ふ代稽古

打たれると思つた通り打たれたり

コウ突けと軍曹殿の荒稽古

月評
金・銀・鐵

艸樂・新水・山雨樓

近作柳樽より

故郷でする洗濯は蟹がある

春 水

山雨樓——生れた田舎へ歸つたものゝ喜び、なつかしみと云つたものがよく表はれてゐる。ユーモリスト蟹を配したところに、その靜かな環境と透明な空氣とが窺はれ、且つ涼味を添えてゐる。叙法の點でも一故郷で洗濯すれば蟹がある」と平叙し易いところを遙かに、そして巧みに切り抜けてゐる。艸樂——なるほど、そう言はれるとこの句が一層引立つて来る。全く諧調なるものゝ六ヶ敷さ、滑べるやうな平叙に陥つてゐながら聲のリズムを喜んでゐる様では、苦心が足りないですれ。此の句面に現はれた環境、涼味といった事は、山雨樓氏と同じ感じ

で見えてゐた。

新水——誰しも持つ故郷に定めし濃き主観が句の上に表はれて来ると、山雨樓氏の思つて居られた通り、それにピツマリあてはまつた句で兩氏と共に同感である。

部屋一パイの兒の香ひかも

都留逸

新水——十四字詩として頭へピンと来る句です。十四字詩でなければ、此の句は想が古いか、頰句があるとかで、表現がむつかしくも知れない。今までの月並なものでも、こうした十四字詩にすると、新しみが生じる譯です。

山雨樓——十四字詩にしたことによつて句が引き緊り、感情が一層高調されたのだと思ふ。で、この句の叙法上での特異な點は

「一パイののの」と、「香ひかも」のののにある。「一パイの兒の」とのが重なるので、一パイにとするよりも言葉として、妥當を欠ぐやうであるが、意味はの方が強められる。それから「かも」であるが、これは高揚した感情をちつと自ら抱きしめて、樂しむと云つた心のゆとりを示し、この句の場合「香ひする」なごより數等優つてゐる。

艸樂——此の句が提出する前に、同氏の「中折がオムツの下につぶけてた」を私が提出しかけた處であつた、ごちらにしても佳い句を出された。

十四字詩として、間然する所のないものと私も思ふ。恐らくは香ひは臭ひが妥當でないかと思ふが、親にとつては、臭も香に變るものであるかも知れぬ。蛇足の様だが此の字に意味づけて置く。

銀世界ふと革命の夜を憶ひ

曼陀羅華

山雨樓——「銀世界」といふ言葉は陳いが、着想の素晴らしさが之を覆つてゐる。そしてこの句のよきは單なる作句的着想にあるのではない。作者の心の中に燃えてゐる人間の情熱が、つと迸はり出て直にわれわれの心臓を温めてくれるからである。

新水——「革命の夜を憶ひ」の下の句は今ま

でに度々聞く句で、銀世界を上を持つて行つたのも陳ければ、ふとが上と下を連らねるのも古い感じがする。こんな新鮮な句にふといふ語を使用せず、もつと上の文字を替える事に苦心をしたら相當よいものが出ると思ふ。

艸樂——銀世界、陳い言葉に違いないが、句の内容を陳腐のまゝに終らしてゐない點は山雨樓氏と同感である。川柳の様な短詩型に於ては止むを得ずかうした文字を使つて冗長を避けねばならぬ事が往々にある。只常套的の文字を其の概念を以つて取扱はず作者の心情を躍らすあるものを感得した場合、そこに新しい詩が生れるのである。此の句の着想は確かに素晴らしいと思ふ。

裏道を知らず叩頭を繰返し

丁 路

艸樂——叩頭もしやうによつては一つの裏道であるが、世中は裏に裏があつて、事終つて後、なんだ、馬鹿氣な事だつたと、眞面目に頭を下げた事を自嘲したくなる。複雑な事柄を、簡単な文字で、締めて了つた所此の作者の老巧さがある。強いて論ずる日には、あまり清新味はないとも云へるが、或る社會相を描き得た堅實な川柳と言へる。新水——作者は眞面目な人であらふ。社會を論ずるよりも、川柳に依つて教へられた

形です。こゝ云ふ着想をわらつて精進されたら、立派な作者となられると思ふ。

山雨樓——此の句を通じて見る作者の感懐は、後悔でも自嘲でもなく、弱者に味方しつゝ、嚴正批判を試みてゐるものと思ふ。世態といふものに穿つた眼を働かしてゐる。だが艸樂氏も云つたやうに着想は古い。無論作者自身としては創作であらうが。

春四月腦病院を薦の舞ふ

珍 景

新水——寫生句としては淋しい句である。併しその淋しい中をわらつた腦病院が、この句を生かしたもので、櫻咲く四月、陽氣な裏に、こんな陰氣な所もある、精神病者への同情とも見られる。

艸樂——「寂び」を捉へた點が、句の生命である。けれども此の寂びをどこ迄も押通して行く意志は作者に於て認め難い。故に深刻味がなくといつてよい。川柳にはも少し深みが欲しい慾を有つ。腦病院が叙景的に取扱はれてゐる以外に、多く柳味を有たないのではなからうか、俳句と川柳のわらひ處がそこらにあると思ふ。

山雨樓——云は、この句は一つの寓意から出發してゐる。それは舊の自由自在な亂舞の對象として、地上の腦病院の拘禁された窮屈さを捉えてゐる點である。それが單に

抽象的なひびに終らず、巧みに具象化されたのでこの句の生命は保たれたのだと思ふ。一服のユーモアも流れてゐる。

新水——なる程、兩氏の違つた見方も参考になる。つまり、こんな句は見方によつてどうにでも動くと思ふ點が、作者をして損な境地に陥し入れた事と思ふ。

川柳塔より

親だけが顔の黒さを賞めて呉れ

文 醉

新水——説明には及ばない親子の情愛が現れて居るが、こゝに川柳のモットーとするユーモアが出て居ないでせうか。實に面白い句と思ふ。強ひて難を云へば、月並かも知れぬが、然し今一步進んで考へると、底のある奥の深い句と見られる。

艸樂——新水氏の見所、親の愛情が、現はれてゐる點に於ては同感である。併し、同時に軽い自嘲がある。一體に句から受けるものは平凡さを免れ得ないと思ふ。それは「賞めて呉れ」が極めて常套語に終つてゐるせいである。

山雨樓——それとも一つ、上五の「親だけが」のだけは妙に理窟めいた響を興へる「國の母」とか「六十の父」とかにしたら句の抽象味を救ふと同時に、上述の難點から免れ

得らるゝと思ふ。

新水——兩氏のお説も、もつともである。最初から月並かも知れんと断つてゐる。併し平凡な上に常套語で終つて居るこの句を、他の文字に替へても、奇抜な句とならないことを認めていたゞきたい。作者と共に研究をしたいと思います。

廣い空打てば打たれて神ほとけ

春 秋

艸樂——「人右の頬を打たば左を廻らして打たしめよ」キリストの言葉である。これは諦めではない。より神の愛を多く受けんが爲めである……いやに説教めいて来たが、此の句をちつと見てゐると、思はず、マイナルを擡げてゐる様な感じがして来た。詩は作者と同一の感動を讀者に必ずしも與へるものでない代り、同種類の感情を起さずか、時には作者の感じてゐない範圍まで、讀者を酔はしめる事も出来る。「打てば打たれて神ほとけ」、大きな光明を握つて人間苦に堪えてゐる事が喜ばしい。

新水——春秋君の句には、人生感を強くする句の多いに驚く。これもその一つで、僕等の真似の出来ない想である。

山雨樓——作者は苦勞人で、人生味の豊かな方だと聞いてゐる。なるほど、艸樂氏の讚辭

にあるやうな滋味がひそんでゐるようだ。けれども今少しく冷淡な觀賞眼を持つて來て見ると、ごうかと思ふ點がある。無論この句は現實的な句ではないが、それにしても餘りに瞑想的、宗教的情操に提はれてはゐないか、平たく言へば、餘りに突飛な感激ではないか。一體廣い空打てばなんてごんな氣持かと想像に戸惑ひするやうな感がある。言葉の手並も語調のよさに、多少引摺られるが内容的に迫る感じが薄いやうに思ふ。

頑張りがきかずに元の道へ出る

紅

艸樂——これも一種の人生の一面をシンボリズムによつて成功した句である。感覺の鋭敏さは若い人にあるが、様々な體験は年輩者でなければ得難い。感覺を尊重される詩歌にあつては、往々にして、趣味の洗練とか、一種の體験といつた事が、軽んじられる傾向がある。併し川柳の領域には、ごうしても、頑として存在せしめればならぬと思ふ山雨樓——さうです。尊い體験が物語る眞實はほんとに人を動かします。體験と云ふことが單に物識りの程度でなく、精魂を培かふ糧となるとき、異常なウェイトを持つことになるのです。この句は抽象的で、稍概念めいた嫌ひもあるが、人生の行路に長けた紅氏だけに味讀する中に、その句境に引き込

まれてしまふ。
新水——兩氏によつて云ひ盡されてしまひ、たゞ老練なことを尊ぶ。

足りぬ家みんな黙つて膳につき

竹 楓

山雨樓——淋しい句だ。しめつばい、風が吹いて來るやうな氣味わるさをすら感じる。だが、その感じだけで見送つてはならぬ。

この句が見詰めてゐる態度は、人生の暗さを白眼視したのではなくて、暗さの中に静けさがあり、静けさの中に、つゝましさのあることを見出し、更にそれらのつゝましい魂と魂とが暗黙の裡に、互にしかと手を握り合つてゐるはしきを見付けてゐるのである。

新水——山雨樓氏に依つて、内容の説明には同感である。併し句そのものが説明に終つてゐるので、もつと表現法をうまくすると立派な句となる。想には成巧した句と思ふ。艸樂——涙ぐましい迄につきつめた感情に驅られる句である。只「足りぬ家」といつた平面的な文字が惜まれる。率直、眞實は句の生命であるから、それをさし置いて、辭句の美化といふ事に苦心してゐると、肝腎の内容を取逃がす恐れがある。だといつて、自由な、効果的な文字を驅使して、句の内容を傷付けず、却つて立體的な表現に、床し

い句ひにと變へて行く事は、詩の嚴命する處である事を忘れてはならない。

六感の働く戀か春かすみ

あや美

新水——戀の句に優しきより、こゝいつたするごい句の方が、可成り成巧して居ると思ふ。他人の戀を見せられたか、自分が戀を求めて居るのか、下五の「春かすみ」で一才不明であるが、この下五によつて句全體を生かしてゐる。大きな力が何よりと思ふ。私は他人の戀へ、自分の六感が、働いたものとして、此の句を推賞する。あや美氏の實感であらう。

山雨樓——も一つヒントが合つてゐないやうだ。が、僕の見方では、病氣で不自由に起居してゐる作者が、夢幻的な情緒を喜びつゝ、春霞の模倣とした中から、六感に觸れた戀の對象を描いてゐるのだと思ふ。結局座五の「春かすみ」が取り逃がしてゐるのではないか。

艸樂——此の座五が、も一つヒントが合つてゐない感じは私にもする。併し、こゝいつた叙法が近來一の傾向を以つて、或る一派の到達が試る處であるが、これは長詩に於ける一シラブルの様な感して私は見る。川柳の如き短詩に取入れる事はごうかと思ふ。山

雨樓氏の言はるゝ様に、作者は取逃してゐるとは思つてゐないのであるが、今日の川柳では取逃してゐると見る外はない。山雨樓氏の解説は恐らく當を得てゐると思ふが、併しかう言ふ句にそこ迄の理智の判断を下す事は危い仕事に思はれ、作者の夢幻的な感情の中に飛び込んで、作者と同じ様な境地を味ふのが此の句の見方であらう。

自尊心こんな嘘まで平氣なり

冬 呼

山雨樓——自嘲の句である。しかし自嘲の爲めの自嘲とは違ふ。人間の生根に灸を据えるやうな痛烈な態度で判決してゐるのだ。僕は僕の倫理觀に訴へて見て、この句から打ちのめされたやうな氣がする。「なり」止めである。この句の叙法は誠に適切で、觀點をよく猛打してゐる。

艸樂——自尊心であつてよかつた譯だ。救ひ難いはうぬぼれと虚榮である。自尊心は誰れにもあつてよい。それ故に此の句の作者が自嘲と反省を示してゐる。力強い句だと思ふ。措辭も確かに當を得てゐる。

新水——人間が横着になると、こんなになつてしまふかも知れぬ。併し有勝ちな事と見とめてもくれる點が嬉しい。それをそのまゝ句にしたのも嬉しい。

ルービンボ

達用御省内宮
社合式株酒麥本日大



人魚回春

石曾根民郎

五十のよはひを遙かにきいてしまつた男が、此頃しさらに年寄つた自分だと氣付いてから、白髪のみつきり殖えた頭を苦にしたし、白髪染めの賣藥廣告を新聞で點檢するようになった。そして案の如く頭の髪へ氣休めらしく藥めいたものをして、ひととりよがりな若々しさを誇つてゐる。見るかげもない、もう數歩おくれた男と見られようとは思はずに、限らないカムフラージに自己満足を得た

いとす。五十を越したこの男の媚態をあさましいと、いちづにけなすべきではなからう。自分の保つてゐるよはひと同じな或ひはそれより遙かに若々しいよはひに廻らうとする殊勝げな氣持ちが、いつも「芽生えに芽生えしゐる。人間のよさといふものが、こんなところにひよこんと顔を覗かせてゐるのである。俗っぽくいへばうぬぼれのひとつが常にあり合ふと申し得よう。だが私はこれを榮

心だとは思ひたくない。縁遠く且つしらくい言葉だからである。私はどこまでもこの人間の心理を軟く清い道化たうぬぼれの心に向ける。そのとき人間のしみぐとした感情に觸れることが出来、生き甲斐らしい理窟を見つるのである人間の心の風が颯々といともなごやかに鳴つてゐるではないか。

老いす衰へず長壽を保ちたい、相成るべくは若返りたい願望をとくくは考へてみる。耻多い、いくとせを延すのははかないことではあるが、生きてゐる意識のうち、せゝこましい世の中で氣のうさを晴らすような感激を培ひたいのである。永久に生きながらへるのは到底望まべきではない。けれども、何か若々しい氣持ちになれるものがあるなら、それすがつてみたくなる。若い女、女に取

が、赤い灯青い灯の色へにちむのに出合ふ。あのよはひ相好をくづすにちと慮つてよい筈だなどと「眼視して貰ふまい。若狭國小松原の人が奇魚を釣つたが、ありふれたものでないことに、おそれて棄て、来たのを、その娘が知らずに食べた。ところがその娘は八百年も生きながらへてゐた。八百尼」といひ、白い膚が結麗だつたら白尼とも呼んだそうである。この奇魚は謂ふところの人魚である。頭は人のようでありながら、齒はこまかで口さし出せば猿に似て、身は魚といふ半人半魚の、想像したわけでも、怪しい相貌である。海邊に沿ふた此處彼處の人々の口に相傳ふる人魚は、これを食へれば若返る俗信となつてゐる。「和漢三才圖會」に「人魚を食うて稀有の長壽を得、容貌十五六才の少婦の如し」の意味見え、「身代苦しからぬ人は、成程若々としても、しかも病ふことなしこれ人魚の汁を吸ひたるにもあらず、金のびるが面白、朝夕心ゆるき故なり」と「日本永代蔵」にある。人魚を食へて長壽を得たために、夫に死に別れることに姿が若返つて再縁を續けてゐるうちに、自身でも恥しくなつて、遂に身を隠し行方知れずになつた話や、夫を始め、親類の者が悉く死に絶え七世の孫も老い果ては、ゐた、まらなくなつて心の赴くまゝに流れ歩く話や八百才になつた時、川に身を投げて死んでしまつたとか、いや死んだのではない、再び八百才の長壽を重ねるために人魚を取りに、行つて姿を隠してゐるの

だといふ話や、長い間旅に出てゐて久しぶりに歸國してみれば、自分が住んでゐた當時とは打つて變つた人家、知らぬ他國の人を當へるような放蕩であつたので、再び旅に出て一千年の壽を得てゐたのを、國の國主にゆづて八百歳で往生した話などがある。

人魚

人魚を喰へば若くなると聞き、いづくよりか人魚をもちつてきたり、亭主それを喰へば十七八に若くなる。女房もまけまいとおもひ、亭主のるすにこれを煮て喰へば、これも十四五になる。亭主なむきん女房にばかり喰はれてなるまいと、また出して喰へば、亭主六ツ七ツの子供になる。女房そのあまり喰らつて四歳、三歳くらゐになりければ、家にて夫婦毎日「まゝごととして遊んでゐる所へ、家主來り」「コレ八助どの貴さまたちはつまらぬものぢや、そのやうに毎日／＼あそんでばかりゐて、おらがはうの勘定はごうするのだ、とうするのだ」とせめれば、八助かぶり／＼「おちい、イヤ／＼／＼」

「嘶の親王」

この小咄と殆ど同じに若返つた民謡が、小縣郡にある人魚のかわりに信州の山國にふさわしい若水を、夢の知らせで飲んだ爺は山から歸つてすつかり婆を驚かせた。爺々しい若衆になつてゐたからである。婆も飲ん若くなりたく、若水の在場を尋ねて行つて飲んでゐるうちに、やたら若くなりたく欲が出て遂にあんまり振舞つたので、赤坊になつてしまつた。婆の歸るのが遅いので心配した爺

が出掛けてみると、木の下で赤ン坊の泣聲がする。婆さんの年より衣裳に若いころが赤ン坊になつた婆がくるまつてゐた。(小縣郡 氏譚集)

人魚といへばなにくれとなく「蘿舞連多雜考」の「吉原の廓より——落籍されるに際しなじみの愛人に與ふ」の、別れ際にいとしい男に差し出した戀文の一節が浮んでくる「人魚とかいふものが、今の世にも、あるならば、年齢を若くも出來やうけれど、年々年をとるのが、厭だ。／＼と言ひつゝも、ふけおとろへて行く人の其處にも、絶えぬのを見ると、いかに開けた世の中だからとて、さういふ藥のあらう筈は、もとよりのない、ソナナ馬鹿氣たことを思つたりしたことを度々でした」に池田文痴庵氏は註するに「筆者が年齢をキにする所は、却々巧妙に記されてゐる。特に「人魚」の傳説等を承知してゐる事や云々」を以てしてゐる。

人魚をとらへて家事を手傳はせてみるに、なか／＼氣が利くなどと物の本に記され、あんなしやつちこぼつた奇魚が人間並みに立ちゐるのかと怪しまれるがこれもその土地での傳説であらう。私が物心のついた幼い頃、活動寫眞の洋劇の筋書は人魚と漁夫との奇しき縁を物語つたものであつた。ストーリーに寫つた人

魚の群はその當時見る目も華やかな天然色のようにおぼえてゐる。人魚と人間の交情は或ひは小野小町に百夜通ひつめた深草少将であつたにせよ、幸福を得られないのにと、同様に間のわるさを思ひ越すかも知れないが、さにあらず何の書であつたか、「陰形な丈夫女子無異、臨海鰥寡多取得養之於池沼、交合之際與人無異、亦不傷人」とあるから、氣を廻さずに意を安んじて可なりである。これはあたかも「傾城魚の抱心いかに春の海」の赤鰾から幸をむさばる漁夫に似てゐるべきではないか。

ときに人魚の夢を見。廣く、深々とした低いベッドに、もうひとつの夢を重ねてアベツク、モア。

尾びれをくねらせてはにかんでくれる波に吻づけ倦れた唇があり／＼とうなづく。肌色のほろ鹹さに、ふと壁に浮んだ海の油繪が目にあかるい。

人魚のあらまほしい想ひをめぐらさぬ人間は蒼白く冷たからう。

人魚が心のひとすみに居残つてゐるならば、せめて若返つた頬の甘さを感じてくれるだらう。

人魚に寄する私の詩は戀である。

日本名所名物川柳

大阪の巻

麻生路郎選

大西長三郎書

(一一) 橋——大阪の著名な橋——

特價品かかへて通る戎橋 あや美

雇ふてはくれぬ身體は難波橋 變人

戎橋働く人が突當り 聞路

鐵橋だ淀川だ子供ゆり起し 同

戎橋地獄に墮ちた親子ゐて 亂耽

戎橋ボートを見てる閑があり しのぶ

戎橋先生だけが貸浴衣 里十九

質入れにゆく人もあり戎橋 豆秋

戎橋密柑に沁るハイヒール 史呂

大阪を離れる音の長柄橋 末廣艸

難波橋株が昂つた足になり いわを

上流も下流もかすむ難波橋 青兒

ハイヂヤンプ上からみてる難波橋 奈里

(一二) 文樂座

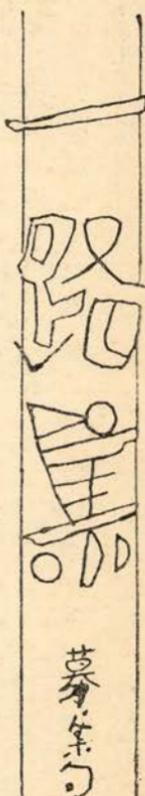
ビルの影沈んで大江橋更ける 山雨樓

文樂のはねへ自家用二三臺 日出夫

淨瑠璃を聞きわけるやうに人形の手
 わからずにて文樂の評を書き
 御寮さんねむくなつたる文樂座
 人形と握手がしたい文樂座
 文樂座親の心が判るなり
 文樂座老後の閑を泣きにくる
 文樂座さんの煙管で喫ふてゐる
 憎まれる人形もある文樂座
 四つ橋を二つ渡つて文樂座
 四つ橋の風と遣入つた文樂座
 文樂へ座ると無口な母でなし
 文樂座手摺の上で腹を切り
 文樂座お茶子の帯がすつてゐる
 孫に世を譲つてからは文樂座
 青兒

文樂で涙のあとのまくの内
 文樂座至寶ばかりが集められ
 不生産的に文樂今日も暮れ
 文樂で株の上つたことを聞き
 聴覚はいまだ確かな文樂座
 古靱の腮へお輕の振りがつき
 亂耽
 彩泡
 沐天
 末廣艸
 雨少
 紀太





團扇

阿部閑生選

落書の團扇乗合發着所紅
眞劍な腫團扇を弄び同
一人づゝ團扇で蚊帳へ煽ぎ込み 菊路
湯上りへヨチ／＼團扇持つてゝ 同
子の寝顔團扇をおいて母は立ち 美津女
舞の手の團扇は同じ方へむき 同
分業を團扇の骨は知つてゐる 春光
澁團扇あふぐ手附も倦怠期 同
團扇繪の裏へもつづく雁の數 耕一路
放送の擬音團扇もいるのなり 彩泡
洋館の窓の團扇は星を見る たまこ
絹團扇みちめに襷せた戀ごゝろ 喋郎
應援へ大きな團扇持ち出され 利生
童話の團扇うと／＼寝て終ひ たいけ
店頭は小さい團扇で客を引き 青兒
團扇持つ事もうれしい夏祭り 御穂子
母に抱かれて團扇持つてる 久米雄

力なく團扇動いて獨り病み 牧人
女の子團扇の繪にも好き嫌ひ 青春
友人の妻の團扇の風に居る 新市街
戀の團扇のうらがへつてる 曉童
涼臺人の團扇の餘り風 稚龍
アパートの暑さ團扇を持て出る 寒草
云ひにくひ口へ團扇の風をやり 史郎
病床をあふぐ團扇が氣に入らず 昇鯉
夏芝居舞臺も團扇うごいてゐる いの助
團扇をば残して置くも戀心 世都象
その次を聞く耳持たぬ丸團扇 宵明
レコードに合は團扇のマンドリン 香山
風鈴がなる湯上りの絹團扇 徳三
團扇手に夜の空氣を吸ひに出る 祥月
麥酒の泡を動かす絹團扇 竹雅
大袈裟に團扇をつかふ郷里の父 令風
瀧へ出る道をうちわで教へられ 有魚

川柳家戸籍調(續)

(係) 山雨樓

- (1) 姓名 (2) 雅號及別號 (3) 生年月日
- (4) 出生地 (5) 現住所 (6) 職業又ハ勤務
- 先 (7) 好きな句 (8) 自信の句 (9) 川柳以外
- の趣味 (10) 配偶者及子供の有無 (11) 嫌
- ひなもの (12) 川柳に手を染めた年月

(3817) 清水米花

- (1) 清水錦三 (2) 米花、別、雨の家、八
- 起亭 (3) 明治三十三年四月十五日 (4) 東
- 京 (5) 東京市麹町區紀尾井町三 (6) 行政
- 裁判所 (7) あけすけに笑へる心豊にて (
- 夢一佛) (8) 明日を希んで致々として居
- ります (9) 運動、錦心流琵琶 (10) 妻あり
- (11) 人絹の如きもの (12) 大正五年夏頃よ

(3821) 植木鬼佛

- (1) 植木梅造 (2) 鬼佛、直木樹 (3) 明治
- 三十二年三月二十八日 (4) 群馬縣新田郡
- 藪塚 (5) 東京市澁谷區佐々木上原一、一
- 四〇 (6) 警察官 (7) 十三日までは大石笑
- はれる (劍花坊) 比翼塚死んで列べて何と
- せう (角戀坊) 凡人に今日の陽當り有難し
- (三太郎) (8) 爲さざれば止まぬ若さが射
- すくめる、人間が足りなく出来てゐる機
- 嫌 (9) 武道、音楽、旅行、讀書 (10) 妻あり

對浴衣うちわを腰に見せて出る 吉左右
 云ひにくい話團扇の繪を見つめ 紫 陽
 以上のうち春光の分業を 團扇の骨は知つ
 てゐる、耕一路の團扇繪の裏へもつらく雁

涼 臺

春 秋 選

涼臺昨日の敵討ちに来る たてうち
 涼臺此處も將棋へ四人立ち 正夫
 大の字に星を見上げる 涼臺 小樓
 涼臺線香花火へ丸う寄り 令風
 戀とまで行かぬ二人の涼臺 長樂
 軍用金を調べに来る 涼臺 新市街
 涼臺話題持ち出す 甘酒屋 いの助
 涼臺子は子で遊ぶ事があり 上上
 涼臺明日も働く身を憩ひ 朝雨
 持出して隣同志の涼臺 雅龍
 涼臺去年流行つた柄である 今雨
 娘の髪の匂ひが近い 涼臺 義風子
 涼臺明日は雨らし 島田の根竹雅
 お向ひの夕餉が見へる 涼臺 利生
 お向ひの夜なべが見へる 涼臺 たけを
 合格の身體をほめる 涼臺 紅

の數、は特選に値するもの、彩泡の放送の
 擬音、紅の乗合發着所、菊路の湯上りへヨ
 々々、はそれ、違つた意味で感興をひ
 く句として推奨します。(閑生)

喜多 春 秋 共選
 姫田 夕 鐘

いゝ身體禪でゐる 涼臺 徳三
 涼臺の娘ばかりへけつまづき 禿山
 兩側の視線を受けて娘ぬけ 石流子
 この夏は母子淋しく涼んでゐる 同
 團扇にて叩き起され 涼臺 御穂子
 夜の道まだ 涼臺に人の聲 同
 梳髪の妻とピールの涼臺 春光
 涼臺口説く順序を考へる 同
 涼臺一番星を子がみつつけ 正祐
 夕燒の空美しくしい 涼臺 同
 涼臺一人が立てばみんな立ち 世都象
 萩敵が来て妻の去る 涼臺 同
 親切に道を教へる 涼臺 紅
 妹が来て姉が立つ 涼臺 史郎

養女一人(11)巧言令色(12)大正八年秋頃
 (323)

關本 一 瓢

(1)關本兵策(2)一瓢、一哲子(3)明治
 三十一年十月十七日(4)石川縣鳳美郡宇
 出津町(5)石川縣石川郡出城村字成四十
 二(6)株式會社加能合同銀行松任支店(7)
 (7)なあちろりこれから秋に親しまう(8)
 路郎海の幸一つの名三太郎
)どのようの坐りに坐りかへてもわがすがた(9)
 信子)茶の味に萩のこぼる、庭の寂(久流
 美)(8)一句を残すのに努力しておりま
 す(9)庭球、觀劇(10)妻あり三男一女(11)
 (11)裏切者(12)昭和四年四月北國柳壇に
 投句が初め。

(324) 後藤 青 兒

(1)後藤政宣(2)青兒(3)明治廿四年十
 一月廿八日生(4)鳥取縣東伯郡下中山村
 (5)大阪市東成區南生野町二丁目三八(6)
 6)日本樂器製造株式會社大阪支店(7)
 氣違になる外はなし善人よ(路郎)元日の
 足袋は着物の上に乗る(かほる)(8)時計
 など見す牛引いて行く、斷りが云へず善
 人立て居る(9)蘭と犬(10)妻、三男一女
 (11)威張る人(12)昭和六年二月。

(325) 宮 岡 白 峯

(1)宮岡義秋(2)白峯(3)三十九年三月
 二一日(4)和歌山縣東牟婁郡請川(5)大
 阪市大正區鶴町二丁目八八(6)大阪市電

天

涼臺去年の顔が揃ふてゐる 正夫

夕鐘選

寝よと云ふ母も寝をしむ涼臺 雅龍

妻揚子追はれたやうに涼臺 禿山

涼臺國體論に熱いこと 世都象

なま仲の酔ひをさましに涼臺 竹雅

此の夏は母子淋しく涼んでる 石流子

涼臺寝冷知らずは寝てしまひ 彩泡

こんな夜だつたわと妻も涼臺 洋三

涼臺通りいつべんの世辭で来る 吉左右

行きすりの涼臺から灯を貰ひ 今雨

眼が冴へる話ばかりの涼臺 しのぶ

おとなりの氣質の知れた涼臺 朝雨

いゝ風だ涼臺内へ聲をかけ 利子

難物が出て来てさびれた涼臺 流石

涼臺小さな洒落を飛ばして見 久米雄

涼臺おまえ裏戸をしめて来い 耕一路

満洲は儲かりそゝな涼臺 泉流

欲言へばジョッキが慾しい涼臺 寒草

涼臺缺伸したのが先に立ち 菊路

大阪で女給してゐた涼臺 曉童

涼臺北斗星が見つかからず 静波

叱られていつそ淋しい涼臺 祥月

涼臺因果話しに更けてゆき いの助

句はせて来て涼臺なぶられる 徳三

涼臺くだけた事も言へるなり 義風子

聲の主垣根を越へた涼臺 花涙

涼臺書とは別な父の口 甲甲

涼臺下女もひと刷毛はいて来る 有魚

借りもなし一人天下の涼臺 同

ちよこなんと地主ちすはる涼臺 白峯

正直な話 隣の涼臺 同

戀とまで行かぬ二人の涼臺 長樂

涼臺思案もある腰を掛け 同

言ひ寄れば承知する氣の涼臺 春光

明眸が星を讃めてる涼臺 同

獨りゐて感傷を盛る涼臺 喋郎

涼臺苦がき思出浮かんとす 同

失戀の口笛細し涼臺 同

秀吟(二句)

母の肩叩く真顔の涼臺 トミヤ

風向きへ子に乗せたまゝ場所 雅龍

軸

空想が夢になりゆく涼臺 夕鐘

氣局(7)名を捨て、十七八の戀もせん(路郎)運轉手君赤靴もよごれたね(山雨樓)咲くからに病む散るからに病む(雅幽)(8)無いので困ります、いまに(9)登山(10)妻と子供二人三對一です(11)賣名(12)昭和四年九月。

(380) 眞田幸捐

(1)眞田泰典(2)幸捐、舊號幸村(3)大正三年六月九日(4)神戸市神戸區再度筋町三九〇八二(5)同上(6)青果食糧品商(7)君見たまへ渡菘草が伸びてゐる(路郎)開店へ棚のはしから儲ける氣(竹楓)(8)これから作ります(9)超スピード旅行、登山、寫眞(10)妻なき故子なし(11)酒、煙草、彼女(12)昭和五年十二月。

(381) 橋本迷兆

(1)橋本長三(2)迷兆(3)明治四十三年一月二十二日(4)京都市東山區祇園町(5)京都市左京區東大路一條北(6)建築請負業(7)散る櫻散らぬ櫻がさびしかる(日車)十二月某日猫の歩くを見(三太郎)クルミ割れば愛なき白き油かす(ゆきさら)孤兒はげんげ流して歸へるなり(昌一)(8)誇りたいほどのものは御座いません。いつになれば一句を遺す事が出来るやら甚だおはづかしい次第です(9)スポーツ全般、演劇、音楽、旅行(10)ナシ(11)關西辯のお愛想(12)昭和七年夏。



東京の 聲音

▼六月八日、「迷亭號を送るの會」別名「塚越正光をもみくちやにするの夕」は約百名の出席を得て盛會。錦浪は迷亭のお通夜にしてしまふし、雀郎の漫談(夫千自身落語と稱する)三太郎の兼題拾題、等正光は完全にのみくちやにされた。啞三味は開會一番に立つて自己及び陣居の立場を明らかにし、陣居は「塚越正光は東都柳檀の人氣役者だ」と題する長詩を

…實行力のないくせに、
かげでこそいふ奴は…
といふ一節がある——それを時には感極まつて泣きながら朗讀した由、この人は「きやり」のモツアブに對する批難の騒撃も痛烈にあつたといふこの例の迷亭

箱は主唱者啞三味が多額納税者だつたと、は明朗な皮肉で、茶六、也奈貴、庸好など、正光が執行した仲間の由「もみくちや」といつてもそれが好意的な慰勞叱正であるだけに正光も喜んで甘受したであらうし、感激したであらうことは充分以上うかへる。この會に對する啞三味をはじめ、御世話人衆の盡力、加ふるに諸家の聲援正光は厚く感謝すべきで、之を拍車として今後の灼熱的川柳精進をはるかに祈る。

▼六月九日「しぶや吟社」の句會淺草で催され、花川洞の主唱で、玉兔朗、芳浪、閃火といつた句會崩れの顔觸れで「正光もみくちや」の延長となり、結局花川洞酩酊の一夜となつて、
EHE
大東京の丑満頃、花川洞の巨體を、倭軀の正光が圓タクへ拜みこんでゐる圖を、私は楽しい想像をて書く。

▼六月十日夕、「杜若論」を執筆の爲、小島町へ品川陣居インタビユーに赴く。江戸子杜若とつつあんが如何にチャキ／＼陣居の快筆にのるか刮目。

▼四月のきやり句座で周魚、六月には迷亭と夫々濟んだから、今度はさしづめ小島町の番であるといふ説もあらう「八十島杜若をエンパロウする會」そんなものが舊手草會の若手連によつて企劃される日もさう遠くはあるまい。

▼六月十一日、神田の萃仙で、「朝鮮の麗月冠を迎へる夕」陣居、杜若、正光、啞三味、仙次朗によつて開かる。「この通り多忙といふ所を知らせるために云々」と啞三味が寄せ書の隅にかいてゐる。彼に「忙しいことそれ自身が君には快樂であるらしい」とでも言つてやれば、どんな表情で開き直つて來るであらうか。

デマの圖にあつて、弱きこ
と印度の神様の如しと稱される玉兔朗一會弟の死その他諸で繁忙。爲にうれしい鷹雀ニユースも餘り入らない。東念寺和尚、即東念寺多忙シヨウ乎。然し私は玉さんの健全な多忙さを、ひそかに祝福してゐる。

▼壽山帖第四巻近々出版の由、尙ほしげを、○丸、壽山、伊志井寛の四人が組んで、純和紙の乙な理窟ぬきの雜誌を出さうといふ計劃がある。但し之は川柳の雜誌ではないさうだが、共に肩のこらない清凉さを我々に與へてくれることだらうと思ふ。

▼五月休會した柳談會、六月の下旬に俳諧亭で開かれる豫定とす。

▼六月廿七、八、九日、明治座で通話會劇、之は川柳家の柿亭一若、菊麿、舞將等出演。

(亂歌)

よき句と巧みな句

福田山雨樓

よき句の中には巧みな句が尠くないが、巧みな句必ずしもよき句とは限らない。所謂悪達者といつて、華やかに要領よく句を纏める作家があるが、斯る人達の句は餘程注意しないと邪道に陥つてしまふ懸念があり、巧みに禍はされて遂に眞實の句を吐き得ずして終るやうな不幸を見ぬとも限らぬ。そして初心者として一讀して巧みなと思ふ句に眩惑され易いのである。

よき句と云ふのは、句の響きが強く大きく即ち生命のある句を言ふのであつて、上手に巧者に作られてゐるやうでも響かぬ句では生命がない。響くと云ふことは感じが移る程度を云ふのではなく、感じが或は應へるものでなければならぬ。響く句は又眞實の句であると云つてよい。

眞實の反對は虚偽であるが、虚偽即ち偽者では人を動かすことが出来る筈がない。尤も眞實と云ふことゝ事實と云ふことは違ふのであつて、少くとも句の上において、事實を表はされれば眞實でないと言はれないのである。寫眞が直ちに繪にならぬと同様、事實をその儘述べたのでは多くの場合つまらない。眞實は實感に根ざした作者の感激或は感興を云ふのであつて、これは必ずしも當面の出来事や其の時の感想に限るものではなく、句を生む心の中に宿つてゐる眞實をおびき出し、更に句の表現の上にそれを生かせばよいのである。

作者一個の人間の瀟過を経た眞實が、最も洗練され最も消化された言葉となつて一句を形作つた場合、よき句は誕生するのである。

今回の課題「少女」の集句中

健やかな少女の生毛光る初夏 葉光
この句が眼に止つた。健やかな少女、と説明を加へた嫌ひはあるが、少女の初々しさを見付け親愛の情味を湛えてゐる。

希望なご聞かれて少女涙ぐみ
この句の原句は

希望をば聞けば少女は涙ぐみ 清春
であるが、添削句の方が餘情があつていゝと思ふ。兎に角右の句には少女の感傷もろさが窺はれ、その心理に觸れてゐる。

以上二句は先づよき句と思ふ。

次の五句はよき句の部類に入れることは六ヶ數が、夫れ／＼何程かの川柳味を捉えており、表現も先づ無難であると云へる。

許婚だと云ふ少女無邪氣すぎ 有魚
東髪にしても少女の氣であまえ 照坊主

制服を脱いで少女は姉になり 松路
飯事の花嫁ませた女の子 劍石

ふくらむおちちが氣になる浴槽 白英
右の内景初の許婚の句は下五の「無邪氣すぎ」

をも少し推敲したならば、確かによき句になつたであらう。例へば「白りホン」と云ふやうに句を印象的に考へることも必要である。

それから白英君の句は、「氣になる」と云ふありふれた言葉をもつと練つたならば句が一段と光つたであらうと思ふ。

しかし練るとか推敲するとかは、單に言葉や文字の末に走ることではないので、誰でもが感じ、誰もが氣付くやうな見方を捨て、獨自な、自分でなければ言へない見方と表はし方を獨創せよと云ふことに外ならない。前二句は集句中異色ある主材をもつてゐるだけに、特にその點がおしまれた。

○
次回からは、本欄の投句數を十句次内に改める。但し採用句は一句である。これは従來

原句

特選の光る少女の像にして
一ツ身が汚れてやつと縫ひ上り
純情の心少女は泣けて来る
敏感な少女になつて心散る
少女から兄ちやんと呼ばれ描いてやり
女の子今日は私服とすれて居る
少女らしい吐息詩集に見せて閉ぢ
悪人と知らぬ少女の瞳なり
洋装の乙女の鼻がチト低い
絹リホンの頃が戀しき齡となり

史呂 石流子 花涙 たてみち 廣石 勇一 久米雄 蛇之助 柳夢 戀好子

添削句

特選の少女の像に深い艶
縫ひ物を抱へて少女逃げまはり
泣けて来る少女の上に花一朵
少女はや多感な顔の色となり
書をせがむ少女にかくし切れぬ媚
制服を嫌ふ少女にある圓き
少女らしい吐息詩集を窓で閉ぢ
邪しまな心少女の瞳と出逢ひ
洋装の少女可愛い鼻である
をんな氣の小宮に思ひ出のリボン

いて貰へば結構である。

○
課題吟と云へば、題によつて句を拵らへるものだと早合點してはいけない。題を通じて自分の中に眠つてゐた川柳を呼び起すのである。百米と云ふ題に依つて十秒と云ふ川柳を作るべく力闘しなければならぬ。題はまた一本の導火線である。課題吟を弄ぶことは導火線を弄ぶやうなものである。

で課題をこなす方法について一二の注意を述べておきたい。

先づ課題を忠實に觀察することである。例へば「少女」と云ふ題が出れば、幼女或ひは娘と違ふ點、少女の特徴と云つた方面をよく呑み込んで作句にかゝることだ。

次に題を離れて想を練ることが必要である。「少女」と云ふ題に對して少女ばかりを見ず、母と少女、教師と少女、海岸と少女と云ふやうに、題からあらゆる放射線を描いて詩囊を豊富にすることを忘れてはならない。

次課題

「下駄」十句以内。ア切 七月十日。宛先 大阪市浪速區湊町保線事務所福田山雨樓宛。但し一般投句と同封するも可。



本社六月句會

六月七日夜 於日本橋俱樂部

新緑の夕！ つい目の先の色街が、軒先へ打水をはじめると、日本橋俱樂部の樓上に、すがすがしい涼風が吹き抜ける。

その清風を胸一げいに吸ひ込んでの句作三昧、自ら「いのちある句」の生れる心地がする。席題兼題の披構後、山雨樓氏から句作研究についての新趣向の發表などあり短夜に拘らず充實した一夜であった。

(出席者)

寒草、素月、雀踊子、末廣艸、白嶺、史呂、遊舟、白柳子、ライト、日出夫、彩泡、雨少、魚水、奈里、沐天、舟人、青踏、杏三、久耶

同人

路郎師、綠雨、山雨樓、艸樂、勇、夕鐘

幸捐、青兒、いわを、八歩、紀太、山月
亂耽、紅、鶴峯、春光、與三郎(冬呼改)
九波、かほる、豆秋

席題 高架線 夕鐘 選

生活層を一直線に高架線 青兒
インナキの酒場の裏を高架線 雨少
不景氣が裏から見へる高架線 豆秋
高架線あんな空地が欲しいなり 彩泡
高架線浮世の背なを見て通り 沐天
高架線とても住めないと思ひ 青兒
薄情な街くれてある高架線 亂耽
大阪を見限る日の高架線 末廣艸
高架線二階の蚊帳がゆれてある 白山坊
高架線女工そろ／＼荷をまとめ 八歩
高架線屋根を這つた風が来る 艸樂

身賣して来た娘がのぞく高架線 豆秋
失業の目に高架線高すぎる 白山坊
大阪の霧へ明けきる高架線 紅

席題 投身 舟人 選

投身今こんな結果にならうとは 素月
主のないボートに主の遺品あり 史呂
投身の親不孝とは知つて居り ライト
ブルジョアの身投げ大きく社会面 日出夫
人間の弱い姿を投身みせ 奈里
投身者の心理になつた夜の怒濤 九波
投身の話に明ける阿波航路 八歩
投身の傍に小さい包あり 末廣艸
投身の持つてた遺書は乾して讀み 白柳子
投身へ蝙蝠低く低く飛び 雀踊子
バラツルは投身の多いところへ来る 同
鉛筆で不孝を詫びて身投げする 幸捐
投身のすこ／＼し前に頼信紙 青踏
澤山なナツプ投身を知らぬなり 同
投身げするうしろに街の灯が動き 雨少
鱈右往左往投身を待つ如し 豆秋
投身の筈へ男女聞きただし 寒草
道をまた廻り廻つて行く投身げ ライト
沐天

書置に誰も恨んでない身投げ
文學を軽んじ身投げしてしまひ
夕鐘

席題 瞳 豆 秋 選

歸もう天國らしい瞳なり
日出夫

眼薬で泣いて女優の瞳なり
寒草

挨拶に瞳は見られまいとする
未廣艸

瞳瞳嫁は媒人に手を曳かれ
艸樂

象の瞳に子供がたとゝ寫るなり
寒草

一杯の酒へ瞳はくすれかけ
ライト

幸福な瞳國旗を見上げたり
沐天

ひとすじの愛を瞳は疑はず
九波

瞳を拭いて巡查が悪む出来心
魚水

繼母と見える少女の瞳のおびへ
九波

だしぬけに妻の瞳は金のこと
青踏

職業意識刑事瞳をじつと見る
彩泡

丸髻の瞳感じて服を着る
與三郎

借に來た瞳膝のあたりへ落すなり
夕鐘

(佳) 注文の瞳に困るミス日本
舟人

(同) 感激へ啞の瞳はまんまるい
雀踊子

(同) 品行方正瞳孔はちぢまりて
白柳子

工面する顔へうるさい煽風機
幸捐

工面して來た夜の席に固くゐる
八步

からつ茶を吸つて工面思ひつき
白山坊

子を寝かしつけて工面はそつと來る
豆秋

國へ行く服まで工面してもらい
白柳子

工面して一番汽車を頼む宵
山月

こまぐと工面したこと書添へる
夕鐘

工面して昔の縁を切る頼み
魚水

工面して空の頼母子かけてゐる
寒草

人間としての弱さに工面する
九波

折柄の雨風ついて出る工面
沐天

自動車で餘程當のある工面
與三郎

(軸) 三圓の工面認印を持つて出る
紅

兼題 將 軍 亂 耽 選

將軍は遺族へ濟まぬ顔となり
魚水

將軍の遺品質素なものを見る
彩泡

將軍へ模範兒童の背が高き
與三郎

將軍の浴衣姿がニユースなり
翠夢

朝霧に立つ將軍の健かき
素人

將軍が平凡に居る植木鉢
同

蛙なく土地將軍に好まれる
雨少

將軍を訪ふて長髪見下され
沐天

將軍の和服へ供が一人付き
かほる

將軍に假名の手紙が届けられ
未廣艸

健啖の馬將軍を悦ばせ
雨少

將軍の日課に朝日拜むこと
青踏

(佳) 將軍へ母國の土が匂ふなり
九波

(同) 將軍の手紙を桐の箱に入れ
幸捐

(同) 將軍の訓示太平洋を指し
春光

本社七月例会

日時 七月三日(火)午後七時

會場 道頓堀俱樂部

(大阪市南區日本橋南詰東入南側)
電話南二七四六番

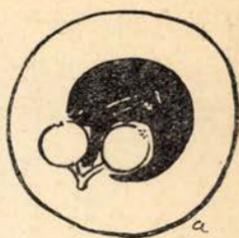
兼題 造幣局 三句 麻生路郎選

同 藥 三句 西田艸樂選

會費 金三十錢

幹事 翠夢、紅、角丸、冬

呼、司郎



古 狸 窟 雜 筆

(四)

梅 本 塵 山

(四〇) 餅化爲鳥

餅の化して鳥となるといふ事は「山城風土記」と「豊後風土記」とに有れど、支那にも斯る傳説あり「茅窓漫錄」中之卷。

羅山文集には、婆餅焦といへる鳥、うぐひすに充たり。是は事物記原に、昔人有「澆戍」。其婦山頭望之。化爲石。其婆爲餅。爲以爲餉。使其子偵之。恐其焦不可食也。往已無及矣。因化此物。但呼婆餅焦也。

此婦の石に化したりといふは、我邦の松浦佐用姫の傳説と全く相同じ。

(四一) 歌菊田

百人一首の歌骨牌を少女などが詠りて「うたがりた」といふ事あり。然るに大人も斯くいふ事あるにや。

「思ひの儘の記」卷三

百人一首の歌菊田は、皆人の弄ぶもの也。慶應三年に千字文の菊田の執筆を、橋本少將實業に仰されたり。

(四二) 赤玉蜀黍

昔は、毎年七月十日を、四萬六千日と稱して、淺草寺其外の觀世音に參詣する者多かりしが、此日雷除とて、赤玉蜀黍を賣りたるも、近頃は稍廢れて、これを賣る者も買ふ者も甚稀になりたり。

「三養雜記」卷之三

むかしは淺草寺の境内にて、この日茶せんをあきなふもの多くいでたり。(中略)今は雷除とて、玉蜀黍を専らうることなども、文化の末に初り、今にさかなり、云々。

「蜘蛛の糸卷」追加

そも／＼赤き唐もろこしは、近き文化

の始め、何國に生せしにや。其以前はなかりし物なり。本草家栗本隨仙院に尋ねしかど、書物には見えず、近來變生の物なりといへり。されば文化年中よりの品物なる可し。雷除なりとは何によるにや云々

(四三) 茶式部

明治時代に女學生等が、葡萄茶色の袴をはくこと流行せるより、女學生を渾名して、葡萄茶式部と稱せしが、此れとは異なれど、昔も茶式部と渾名されたる女ありき。

「柳庵隨筆」

音無川。聚樂の茶亭の女、常に歌を好み、折にふれたる事など、三十一字につゞり口すさび、人にも語り慰みしを、誰いふとなく、多くは他の詠る歌なりといひふれしを聞傳へ、口惜くや思ひけん、

或時、人の袖を引とめて、是非に題を
と請ければ、古の小式部のふるまひに似
たり。さらば我等が身の上をよめといへ
ば、しばし案じて

古郷は曉野となりし人と聞けばさそ早
蕨の名をも厭はむ

と書したる手跡もいづくしく、仰そむか
ぬ迄に候、覺させ給ふなといふ。是より
世に傳へて茶小部とぞいひける。

(四四) 狸毛筆

毛筆を造るには、越後國より産する所
の、狸の毛を必要とする由なるが、狸毛
筆といふものは、古より世に行はれたる
ものの如し。

「性靈集」第四

仰毛筆四管 眞書、行書、 右伏奉、昨日
草書、寫書、
進上、且教筆生坂井名清川透奉進。

(四五) 庫裏姥

寺院の梵妻を渾名して大黒といへど、
昔は庫裏姥とも、庫裏婆ともいひたるが
如し。

「好色五人女」卷四

出家の役なればあまたの法師めしつれら
れ、晴間をまたず傘をとり、に郷寺を
出でゆき給ひし跡は、七十に餘りし庫裏
姥ひとり、十二三なる新發意一人、赤犬

ばかり殘物とて松の風、云々

(四六) 小僧

今日にては、青年者を罵りて、小僧と
呼ぶ事あれど、昔は著名の高僧を、小僧
と稱せし事あり。

「續日本紀」第七

方今小僧行基、拜弟子才、零三學街衢、
忘説、雜福、會、構、朋黨、楔、刺指臂、
厭門假説、強乞餘物、詐稱聖道、妖
惑百姓、云々。

(四七) 扇屋花扇

天明の頃、新吉原江戸町一丁目扇屋宇
右衛門の抱遊女花扇は、老母に孝行なり
とて、其事蹟を印行して賣出され、一般
世間に喧傳せるが、花扇は數代あり、
孝子の名を得たる初代花扇は、書家澤田
東江の門人となり、筆札を善くしたるが
二代以下にも書を善くせるもの有りしと
思はる。

「京雜の記」下之卷

北里五明機なる花扇とかいひし遊女、
老母に孝行なりとして、その事を板して
巷に賣るものありし。予このころは弱冠
なりしかば、その事とも聞ものから、
耳の底にはとめざりに、友人南野ぬし
嘆賞のあまり、彼孝女傳と題せる小紙二

頁を藏めたり、云々。

(四八) 湯尾峠孫杓子

江戸時代に、市中を數人一團となり、
「湯尾峠の御孫杓子、痾瘡も軽いな、痾
疹も軽いな」と唱ひ且踊りて、錢を乞ふ
者來りしが、此れは越前國湯尾峠に有り
といふ痾瘡神に代參の意なりしならむ。

「嘉良喜隨筆」卷二

越前ノ湯尾峠へハ、府中ヨリ三里アリ。
古へ痾瘡ノ神、コノ湯尾ニ一宿ス。コト
ニ馳走ス。其禮ニ此守ヲ押テヤレ。ソノ
家ハ痾瘡スマジキ迎。湯尾峠孫杓子トカ
キテヤルヲ、板ニシテ賣也。府中ノ城内
ニハ、痾瘡スルモノナシ。云々
此記事に據れば、孫杓子にあらずして、
孫杓子なるを、誤て傳へたるもの也。亦
彼の地にては、痾瘡除の杓子を賣り居る
といふ。

(四九) 蠶螂の斧

「蠶螂の斧」といふ諺あり。此れは「文
選」の「欲上以蠶螂之斧、禦隆車之墜上」
といふ文に據るものなるが、「臂を怒ら
して車轍に當る」といふ文も有る也。

「莊子」天地篇

猶蠶螂之怒臂以當車轍、則必不勝
任矣。

白井梅里君を偲ぶ

生 田 翠 夢

若め二本残して梅の朽にけり
去る六月二日午後十時右の句を 辭世とし
て、本社豊橋支部幹事白井梅里君は 長逝さ
れた。

かれて病褥にあつて醫藥に 親んでゐると
は聞いてゐたが、そう 急に病が革まるもの
とは豫想もしなかつた事で、寸暇を得次第
一度訪問しやうとも考へてゐた 矢先に、黒
枠の封筒を受取つたときは、ハツと胸を突
かれた。

梅里君とは去年の正月、豊橋を訪づれた時
逢ふたのが最初で、また 最後となつた。あの
時かけ違つて君の宅を、豊橋から約一里吉
田用水に添ふた道を、南して訪づれた。

母家から離れて 入口の左手に、君の勉強
室が 建てられてゐて、君の川柳の交友を示
す短冊が無数に貼られてゐた事を 未だに覺
えてゐる。

梅里君は郷土を愛する事は 人一倍で居村

平呂吉田村の村誌を獨力 刊行して、その續
編編纂中に仆れたのだつた、御實弟 からの
來信によると、ごうも過度の 勉強のためと
思はれる節が多い。

君は孤軍よく 本社の支部幹事として活躍
し、三河に本社あるを 知らしめた功績は大
なるものがある。職を豊橋 日日新聞に十數
年奉じ別に「大豊橋」なる 郷土文藝誌の刊行
に従事して、とう／＼居村々誌のため命を
縮めた。

もうあの朴訥な 三河辯を君の口から聞き
得ないと思ふと、今年春 逢へなかつた事が
殊に心残りだ。梅里君を偲び 地下の冥福を
心から祈つてゐる。

祖苑梅里居士（行年 三十七歳）ひき子未
亡人と二男兒が淋しく 殘されてゐる。

六月十四日盛大に葬儀が 取り行なはれた
さうである。

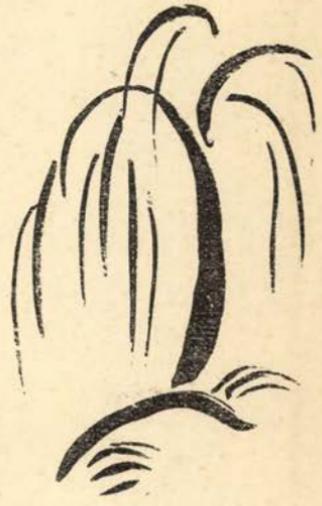
道 悼
今は儚なく 幻にのみ殘る 翠 夢



本社豊橋支部幹事故白井梅里君の葬儀（辦法寺にて）

各地柳壇

いちのあを創る



路郎・緑雨・二南整理

綠雨氏令閨追悼句會

六月十三日

於日本橋俱樂部

去る四月二十六日、大皇帝大病院で永眠されました。本社總務橋本綠雨氏令閨外喜様を偲ぶ集りが主幹と同人の發起で、入梅の翌十三日午後七時から開かれました。

奥様は作句はなさいませんでした。本誌の爲め夫君を助け直接間接川柳に寄與せられたました其大なる功績を偲びつゝ、しめやかに作句に精進、山雨樓氏の開會の辭に次いで、夫君綠雨氏の挨拶續いて、ひろし氏の御話、最後に主幹路郎先生の外喜さんを憶ふの御講話あり、柳秀氏の弔電、追悼句及各題の披露ありて午後十時過ぎ散會いたしました。

出席者
路郎先生、山雨樓、溪花坊、華氏、紅、鷗峯、亂耽、九天、いわな、青兒、白峯、雅幽

新水、かほる、變人、遊歩、鮎美、靜波、沒食子、喜由、日出夫、史呂、紳樂、末廣紳、遊舟、昇鯉、魚水、豆秋、綠雨、美那子、彩泡、四路平、月磨、山月、幸捐、八步、泉流、白柳、美代坊、秋、里十九、小柳子、清美、勇、松太郎、素人、與三郎、春光、ひろし、ライト、禿山、舟々、紀太、比古、琴人、鶴足、水府。

席題 下 賦 五 選

下駄で来てちとまごついた松竹座 彩鯉
花街へ利久の音を高くたて 昇鯉
遠慮する下駄をきつちり揃へたり 變人
湯上りの下駄がひんやりする若さ 鮎美
下駄 へて歸つた風呂へ雨が降り 華水
内弟子はいつものとこへ下駄をぬき かほる
酔ひさめて下駄の重たい灯を戻す 紳樂
感情のもつれ手荒く下駄を履き 溪花坊
マ那人の下駄川口は雨が降り 紅

我足の型に凹んだ下駄の汚點 喜由
席上 缺 勤 ひろし選
缺勤に社長の髭を思ふなり 月磨
缺勤續き結婚ですかと聞かれてゐ 勇
缺勤をせれば逢へない戀をする 遊舟
日給の身に缺勤が續くなり 史呂
缺勤の机へ道入る逆光線 末廣紳
缺勤をしるさかひを續けたり 喜由
模範工嬉しい事で缺勤し 彩泡
面會にたま／＼行けば来て居らず 舟々
缺勤へ服の月賦を取りに来る 幸捐
缺勤をして小兒科へ連れて行き 沒食子
缺勤の靴が、迂る階段 紅
缺勤と知らず母親起きて来る 白峯
缺勤の鼻へ金魚はひるがへり 鮎美
缺勤へ妻の氣持の色紙掛 亂耽
缺勤へ妻は案外働かず 山雨樓
缺勤を不安がらせるベルが鳴り 白柳子
席題 二 階 素 人選
お二階へ戸締りをする念を押し ライト
二階からの家賃はきち／＼と取り 泉流
無口者こと／＼音のする二階 松太郎
二階借り明日の水も汲んでおき 白山坊
植木鉢さでどこがい、二階借 九天
蓄音器に飽いて二階の風に居る 華水
防空へ二階ともかく閉めて見る 新水
裏二階電車へ見せた影法師 喜由
お二階の音を氣にして寝てしまひ 里十九
揶揄の二階夕餉の煙がくる 山雨樓
結論を聞き得ず二階から降りる 亂耽
集金へ二階の人が居るばかり 彩泡

書留へ二階嬉しい音で降り
(軸)何も言はずに二階かわる腹
素人

初夏の宵神經質へ灯が揺れる
紅花坊選

ほの暗き灯に情慾の寒き部屋
魚水

歎樂の灯へ制服の親しめず
八歩

演習に我が家の灯とは言ひか
九天

灯の消えて別れの日を思ひ
新水

空腹へ街の灯は明るすぎ
泉流

行燈の灯まゝ一廻りして来よう
里十九

俳優に佛間の灯丈け残り
山月

凱旋へ陸の灯ゆれるなり
青兒

條件をつけてネオンの灯をくり
白峯

團服の整理夜店の灯がともり
幸損

灯の色も思ひ出となる室に坐し
乱耽

吾が家庭樂しきものよ灯が一
史呂

自殺者の心理に街の灯が點り
末廣艸

佛の灯夕飯守るやうにあり
四路平

國すて、灯に末練ある橋を越し
九天

(五)あ、今宵ネオンに意識奪は
遊舟

(同)灯の下に賛しき色の壁とな
喜由

(同)よい智慧はないかと暗い灯
變人

(同)母思ふ燈明の灯がゆれてあ
清美

(人)異端者に希望も無くて部の
月磨

(地)見凝む燈は暗しケラス乾す
遊舟

(天)灯のながれる風は日本刀
鮎美

兼照 金 盞 緑

金盞みつめて無口いたはられ
雨選

金盞嬉しい顔を洗ふなり
乱耽

金盞へこんだまゝに残される
變人

子の物となつて淋しい金盞
青兒

金盞妻落ついた歩きぶり
秃山

金盞少し花緒がゆるいなり
豆秋

金盞派手に落して叱られる
華水

金盞また洗粉が違ふなり
松太郎

金盞石鹸のけて子にも金盞
遊舟

限りなき夫婦へさびぬ金盞
曉珠

金盞入院前のそのまんま
あや美

(人)金盞病人の手に動かされ
かほる

(地)ぬか袋乾いたまゝの金盞
末廣艸

(天)髪洗ふ手に金盞すべらせる
溪花坊

兼照 丸 鬘 路郎先生選

女房の丸鬘ばかり見て暮し
失名

丸鬘も一度は結つた女中なり
清美

丸鬘をくづして妻の夕涼み
魚水

丸鬘の部には屬する祖母の鬘
山月

丸鬘の一盃うけた頬の色
彩泡

丸鬘が好きなら主人の日本趣味
喜由

世間體だけの丸鬘美しく
松太郎

丸鬘で歸へる夜行の氣笛なる
白峯

丸鬘で心苦しむ無心なる
没食子

丸鬘の型が入つて来る玩具函
末廣艸

丸鬘で來て奥様だとわかり
美代坊

丸鬘で帳場の横へ來て坐り
いわな

丸鬘を舊師ひやかしたくもなり
九天

餘程氣が勝れざりしか鬘を解く
舟々

丸鬘一度も結はず死にました
ひろし

格子戸を軽く丸鬘凄ふ出る
白柳子

童心なつて丸鬘美しく
あや美

丸鬘に忘れられてる赤い糸
葉光

丸鬘の寫眞に新たな涙
小樓

逆ほぬ事に丸鬘氣をつかひ
明珠

丸鬘に結んでゆかせてやりたく思ふ
曉童

友達が來て丸鬘は灯をはなれ
紅艸

丸鬘の結び立てて匂ふ冷奴
曉童

丸鬘へ時はごん／＼進みゆく
紅艸

丸鬘に結ぶても理解して呉れず
亂耽

こゝは仙境丸鬘で泣き崩れ
溪花坊

眞操感とは別に丸鬘すきで結び
久流美

錦繪の丸鬘ごこみだらなる
紀太

丸鬘に結ふた我が娘が瘦せて見え
同

丸鬘に結んで眉毛がうすいなり
同

丸鬘同志つゝましく櫻んぼ
同

丸鬘のものかなしき僕はぎん襖
同

手柄の赤さき我儘が云へ
同

腐れ縁ですと丸鬘酒を提げ
同

丸鬘の女將郵便立つて讀み
同

(人)深水の繪の丸鬘に近よれず
久流美

(地)日本の銃後丸鬘しやんと立ち
與三郎

(天)籍も入れずに丸鬘を結へると
春光

(軸)だいたいごを威歴と鬘なりし
路郎

追悼吟

時計がとまらさびしきですよ僕等は
路郎

春雨に儼然として香を焚く
清明

匂一吟香一捻の夜にならぬ
東魚

草笛のかくもかなしく鳴るものか
水府

縁から縁へ雨も降り染り
周魚

うちしめる八十八夜うすさむし
鞍馬

うつむいて泣いてもらし白い百合
久流美

(輻見送) 下駄あはてゝる高架驛 山雨樓

癩癩のそれ程猫はこわがらす 披講 五選 天 秋

癩癩な夫へ大聲でバナ、預け 天 八

泣き入した子に癩癩玉を悔ひ 喜 山

癩癩を抑へ手を抱いて出る 水 客

夕立のなかに癩癩たてゝ来る 同

雜吟 二句集誌 山雨樓選

指先をまかして女給眼にする 比 夏也

手ぶりで話す啞の子に目をそらし 水 客

氷 囊と 氷 枕へ君の鬚 晃 路

氣短かを笑つてるのか通風筒 九 天

(人) 朝汁吸ひつゝ富士を車窓に見 明 坊

(地) 奈良七重聲の大きい案内僧 某 人

(天) 猫の眼へ鴨川の水濁つてる 久 米 雄

畔柳塔(第三回) 課題 田舎 山雨樓選

村芝居座布團持つてやつて来る 喜 山

肺量器田舎のオン見せてやる 木 履

(人) 納税期煙管つまつてゐる田舎 ひ さ し

(地) 夢の穂へひよつゝ友の老顔 久 米 雄

(天) 乗合ひへいきき 鷄が出る田舎 某 人

阪大川柳會 (大阪)

五月二十五日 丸島利生報

兼題 遠 足 路 郎 選

遠足に先生二人後に 香附子

しようじんの悪い顔々天満橋 青一路

遠足へ飲みなはんやと送り出し 一 杯

旅装はアルビニストの如くなり 筑 川

ヒクニツクブランがあつてない 築 川

行く春を追つかけ廻るヒクニツク 築 川

ヒクニツク傘も買はずに酒を呑み 正 甫

遠足へはしやくなかに松葉杖 柳 秀

遠足へ母買物に出るこゝろ 水 炭

リユクサツク心齋橋を通り抜け 柳 秀

(人) ヒクニツク兄は女にやみ過ぎ 柳 秀

(地) 敗軍の姿 遠足雨に遭ひ 柳 秀

(天) ワブションの 遠足休もぬ 柳 秀

兼題 妹 路 郎 選

あなただの妹よりなごゝ書き 路 郎 選

妹の背丈がプラの如く伸び 路 郎 選

妹で通つた頃の懐しき 路 郎 選

妹の意見に母は同意なり 路 郎 選

我儘は姉にも優る賣れ残り 路 郎 選

妹は姉をしのいだ遊びやう 路 郎 選

舎ふ毎に變つた妹つれて居る 路 郎 選

(人) 卒直に言ふ妹をもてあまし 路 郎 選

(地) 妹の様に愛する氣だといふ 路 郎 選

(天) 學友を姉さんと呼ぶ日の迫り 路 郎 選

兼題 公 園 路 郎 選

おみくじを握つて公園斜にぬけ 同

公園の出入の上をアドバリン 同

公園に来て藩公の庭と聞き 同

公園へいつしが二人の足が合ひ 同

公園で寝たと云ふ人正三位 同

(軸) 公園のラヂオ一株持たぬに 同

川柳 松江句會 於みどり喫茶園

六月三日夜 兼題 明快 席題 癩、居留地、前身

首尾 イテリ、験、人格、曇り日

居留地の巡查もわし劍の音 一 湖

母と娘の験もぬれて夜を明し 同

居留地でうんと儲けて左様なら 無 鐵 砲

前身はごうであらうと出世振り 同

裏切つてやる彼奴の人格 同

前身もなく百姓で老ひんとす 同

験から君の悲哀がこぼるゝよ 同

上首尾と云ふ乾釜のプランテ 同

人格者にされた男の無表情 同

倫落は験を黒く塗つた春 同

忘れたい氣持へ曇る丸の繕き 同

切れそうな話の手紙丸めたく 同

あれからは心の曇る日の多き 同

明快なゴルフパンツで新歸朝
 居留地に歸りたい妓も居るだらう
 トーダンス癪にさわつた釘があり
 明快な砂塵となつてスプリングター
 人格の折目正しい袴にて
 人格の裏を覗けば面白い
 居留地の水にも慣れた頃の戀
 居留地に心至んで住み慣れる

川柳 鶴町句會 (大阪)
 五月二十九日 於自助會俱樂部

兼題 井戸 没食子選
 大阪城凌へて見たい井戸があり
 車井戸向ふに青い山が見え
 女房の慾は此の家に井戸と言ふ
 井戸端へ雀の夫婦 碇ぎに来
 咽喉佛茶店の井戸へ息をつぎ
 (住) 井戸端の男に頼む事が出来
 (同) 子のせがむを井戸に出して
 (同) 車井戸の姿の老ひませり
 (軸) 重寶な井戸で飲料不適なり
 兼題 月末 豆 秋選
 月末の商賣人へ雨が降り
 こんな事に腹を立てる月の末
 月末に行けば皮肉な事を聞き
 月末を將棋の相手を探して
 (住) 月末を大きな聲で語れず
 (同) 月末を待つて妻の髪の艶
 (同) 薄給の笑ひたくなる月の末
 (軸) 月末を檀那寺から拜みに来
 席題 決 心 禿 山選

決心がつかぬ女房や子の寝息
 決心の手紙をどこへ置かうかと
 決心へどこかの時計二時をうち
 決心を止めさす妻の必死なり
 唇は決心をした紅きなり
 決心はもう御破算を止しにする
 戀人にだけ決心を聞かせて
 決心がついて圓ク呼び止める
 決心をしてもやつぱり吃るなり
 (軸) 決心の腹から口へ一文字
 席題 空 氣 紅 選
 險惡な空氣に電灯ぶら下がりに
 急曲線空氣枕の位置を替へ
 見舞客空氣の事もほめて去に
 マネキンは別な空氣の中にある
 (住) シヤボン玉空氣を丸く包み
 (同) 漆からの空氣をほろ猪口を
 (同) 郊外の空氣は青い松が生へ
 (軸) 郊外の空氣は青い松が生へ
 席題 働 く 春 光 選
 働いて酔ふて廿歳は暮れにけり
 働いてゐる空想の面白く
 働けば煙草は別な味を出し
 働ける内は大きな事を言ひ
 働いてゐる血色を顔に見せ
 馬も尾を振つて働さからもどり
 席題 返 事 音 水 選
 返事一つ引けば返事になる事あり
 棒一つ引けば返事になる葉書
 金の要る事は保留して歸へり
 使い賃費ふて戻るい返事
 豆 秋
 春光
 雀踊子
 冬 呼
 遊舟
 吾水
 紅 幽
 禿 人
 山 人
 選 人
 三 丁
 没食子
 遊舟
 冬 呼
 變 人
 紅 呼
 光 選
 小柳子
 變 人
 雀踊子
 遊舟
 没食子
 豆 秋
 水 選
 小柳子
 春光
 没食子
 紅

嚴肅の二つ返事なとがめられ
 喜びの日は大ききに返事する
 (軸) ソーダ水眼で返事する事が
 席題 人 目 雅 幽選
 馬鹿らしい夫婦と人目にも見えて
 泣いてゐてふと人目をば考へる
 眞實の握手人目がものたらず
 人目もあると格子を洗ひ
 (住) てれくさい人目へ石を蹴見
 (軸) 人目忍ぶ身にどんぐりが落ち
 川柳 高知句會 (高知)
 五月廿一日於ブラジル樓上中澤瀾水報

兼題 五月雨 五 選
 五月雨に花の姿態の悲しきや
 五月雨に途を迷つた蝸牛
 五月雨に志あり病んでゐる
 席題 峠 五 選
 卷壽司の巻きが大きい峠茶屋
 煙草の火つけて峠へ帆が見える
 席題 自轉車 五 選
 自轉車の話寄りすぎ離れすぎ
 自轉車の置場に困る火事見舞
 席題 素 直 互 選
 聞分けて涙かくしてさへ呉れる
 オプラー母の言葉に減つてゆき
 叱られた時の妻直に意地があり
 末の娘が仰せの通り朝を掃き
 川柳 戸 句 會 (神戸)
 六月二日 於明珠居

兼題 星座

厄介になつて手すりて星座を見入り相の鐘に星座のかすかなり

兼題 床の間

床の間へモタンカールがよく騒ぎ無駄多き暮した床の間に見つけ床の間に習つた通り生けてあり

兼題 人絹

人間の慾は人絹では居れず人絹とすぐに見破る女の眼人絹に見えず得意の鼻白し人絹の袂に風があつた丘

明珠居偶會(神戸)

五月六日 明珠報

兼題 初夏、寫生

激論のまた負けか、り勝ちか、り激論の友の帽子を渡すなり初夏の障子を開けた日曜日茶を少しのけて激論続けられ初夏の影レッスの向きを變へ見る

川柳 螢ヶ池句會(大阪)

六月十日 石森靜太報

兼題 頰

頰赤く健康體の型である體重が増えて頰をばなでみるいちこふくむ頰から戀が生れくる恢復の寫眞の頰はまだほそい頰杖はもう小遣のない姿(佳)頰落ちた男するごい話する(同)久し振り歩めば頰へ風ぞぞる

(同)頰骨に觸れる朝々さみしき(同)戀のささびしい頰がさらんだ(同)頰丸ふ愁ひのかけもすべる

兼題 旅

旅に病んでしきりに想ふ芭蕉の句(佳)いさゝかの土産も旅のこころ(同)女房に言へない事もあつて旅(同)よるの雨旅寝の夢をたたくも(同)風粉れな旅チクタイをかき朝(同)旅の夢は他愛もなく變り(同)旅の夢空氣枕にふれてゐる

兼題 蚊帳

蚊帳吊りて女の心のみたる朝刊を横ける蚊帳に風がわたり蚊帳重く垂れて不眠の夜がつつく(佳)蚊帳の匂ひ母の姿がありそ(同)蚊帳に風あり病室の灯が暗い(同)蚊帳吊つた夜を淋しい未亡人

兼題 風

風の街へ(帽を抱いて出る時々は人間風に負けるなり)時々の風を横切る女事務

川柳 松山句會(松山)

五月十二日 於ABC楼上

兼題 氣まぐれ、不思議

チユウリップ夢を包んだ形で咲き考へた形で咲いてるチユウリップチユウリップブロー嬢の母も賞めチユウリップを隔て、つづまじ話

合掌の形で咲いてるチユウリップ氣まぐれに子供の馬になる休み氣まぐれな雨に白靴あわてたり氣まぐれに歩くのでない犬を連れ氣まぐれに歩くつもりの大街道氣まぐれな話ですまめ仕儀となり氣まぐれに強く三味線も戀の唄氣まぐれな旅添書を反古にする氣まぐれに呼んだ藝者の喋りよう氣まぐれな戀を幾つと女給もち其の昔不思議を包む玉手箱七不思議呼けぬまんまの有難さ初帖の相場も聞いて箸を取り軸物もかわりて帖が膳につき銀鱗のピカリと初夏の水解禁の帖の大きき指に見せ山水繪になつて帖釣り暮れてゐる弓なりの竿瀬を割つて帖光り不思議な繪一座協議をして解けず座布團の皆を立たせて不思議がり君帖が云ふ間に帖々々走る

兼題 舟

借傘に戀と言ふ字は書いてなし引け時へ借傘の續く工場街傘一つ二つ鳥居の中に消え傘一つ持たづ暢氣な旅に出る

兼題 御旅句會(大阪)

五月二十日夜 於心齋橋 生田翠夢報 永らく休んで居ました「お旅の集ひ」を、本日より甦生する事になりました。

兼題 舟

借傘に戀と言ふ字は書いてなし引け時へ借傘の續く工場街傘一つ二つ鳥居の中に消え傘一つ持たづ暢氣な旅に出る

兼題 舟

借傘に戀と言ふ字は書いてなし引け時へ借傘の續く工場街傘一つ二つ鳥居の中に消え傘一つ持たづ暢氣な旅に出る

席題 石 路

郎選 紀太

鞍馬石、那智石、庭は亡父のま、石ころに一つ一つにある故郷、雀の巢石の鳥居を借りてゐる、大ジョッキ重たい音の大理石、春の溼平たい石を投げて見る、海岸に石積んで見る日も有りぬ、石一つ二つ濡れそめ雨模様、裏山の石に悲戀の名を書かむ

聲だけの雲雀を背の子が探し、草笛はいつか雲雀の唄に合ひ、散歩する異人四五人、雲雀飛ぶ、バラソルか雲雀數へるやうに飛び

三枚目素顔案外い、男、あばづれの素顔で歩く戎橋、花牌女優の素顔ばかりなり、素顔そむけて娘惚れてかへり、晝下り女給の素顔見てもかへり、馴染には素顔のまんま逢に出る、たしなみを忘れた顔でふくれてる、御化粧を忘れて處女の三十二

札入を、つた妓の酔ひ加減、責任の無い責任ばかりよう喋り、明鏡止水で責任を逃げてゐる、責任を身に負ふ如く口重し、責任の兄に失業の日が續き、責任を荷ない兼れてる愚痴になり、宿り番責任者として呼び出され

舟々々、清美、禿山、あや美、同、四葉、清美、同、紀太、清美、同、舟々々、清美、同、舟々々、清美、同、あや美、同

責任は俺にも有るからまあ呑まう、(人)責任は口先だけ、女店員、(地)責任を果して鳩は目をつむり、(天)責任を餓のやうに逃げてゐる、五月二十七日、去る二十日生田翠夢氏結婚せらる、

翠夢氏御結婚披露宴句會、於阪町いし堂、今朝からは二人で使ふはみがき粉、新婿を其儘職業線に立ち、下駄箱のうるおみを持つ新世帯、新婿は別な笑顔で話される、稼げ働けがつちり組んで共白髪、新妻の言葉のまゝを聞かされる、そうだつたなアと新婿の思出よ、(人)うたゝ寝るふきかゝる妻の味、(地)ホネムーン何處の港が美しく、(天)新婿へ襖もとろけそうな色、六月二日、御旅吟社同人として久しく御活躍下さつた芝四葉君はこの度家庭の都合で歸郷せられる事になつた。

お隣の茶碗をわつた音に醒め、音沙汰のないのは無事で暮し、雑音を消した社長のせきばらい、淋しさは八ツ手にかゝる雨の音、

御旅吟社同人として久しく御活躍下さつた芝四葉君はこの度家庭の都合で歸郷せられる事になつた。

四葉氏御歸郷送別句會(大阪)

六月二日、御旅吟社同人として久しく御活躍下さつた芝四葉君はこの度家庭の都合で歸郷せられる事になつた。

ほゝ、ぼわは米の値下り案じてゐ、いひわけをしながら米を上げて、利息にもちと足りかゝれる米俵、歸國なご人事にして遊んでゐ、スボンの折目大阪歸りなり、歸するんだ戀もすてるよ、歸國したい心の隅に影がさし、(人)嫁さずがすわけは息子が歸國、(地)歸國して父の心も汲んでやり、(天)又來ると歸國氣易う言つて、

招かれて行けば疊の香りなりなご、芳墨の香り唐紙へ一と上り、清質に馴れて番茶の香を好み、大柄のセルの香りを見送つて、(人)曉の蓮池の香の旅にゐる、(地)一輪の香り手紙を書くとする、(天)愛慾を悲しみ御盞の香に浸る、

盜電は主婦の、心得とも思ひ、盜電のお茶まで出して詫がるなり、喜びの日の盜電を許されるなり、盜電をすれば汚ない部屋になり、盜電の炬燵に慣れて春も逝く、(人)家庭團圓盜電してゐるなり、(地)電氣鐵道犯を意識せずつける、(天)御詠歌の夜の盜電に氣がとどる、

川柳、玉造支部句會、雜誌社、二十七日夜於東京俱樂部、丘遊舟記、兼題、香、り、溪花坊、呼、冬、呼、柳、堂、耕、之、介、白、柳、子、青、踏、友、帆、青、踏、白、柳、子、選、春、光、青、踏、遊、舟、溪、花、坊、青、踏、溪、花、坊、村、句、茂

盜電は主婦の、心得とも思ひ、盜電のお茶まで出して詫がるなり、喜びの日の盜電を許されるなり、盜電をすれば汚ない部屋になり、盜電の炬燵に慣れて春も逝く、(人)家庭團圓盜電してゐるなり、(地)電氣鐵道犯を意識せずつける、(天)御詠歌の夜の盜電に氣がとどる、

(軸) 盜電にローソクの要事も出来 白柳子

席題 弗箱 没食子選

弗箱の朝はミルクとパンに馴れ 耕之介

弗箱であり荒っぽい事を言ひ 白柳子

弗箱があり天下茶屋にて師匠 溪花坊

弗箱の住替したい希望なり 柳堂

(佳) 桃色の噂 弗箱笑つてゐる 雀踊子

(同) 高級の與太弗箱にされてゐる 友帆

(同) 結婚のデマを弗箱氣にとめず 耕之介

(同) 弗箱を引き抜く役を買ふ男 春光

(同) 弗箱と云ふ名で擧取されてゐる 青踏

席題 海 戦 柳 堂選

(五) 濠戦の後を弔ふ豪雨なり 青踏

(同) 洋上は彼我の砲火の巻なり 村句茂

(同) 甲板は屍山血河の生地獄 同

(同) 魚雷今深夜のうれり縫う行き 耕之介

(人) 五月二十七日老元帥の夢新ま 柳樂

(地) 母艦第二線にあつて濤荒し 溪花坊

(天) その機先既に水雷發射管 同

(軸) 白旗を掲げた艦の傾いて 柳堂

席題 苺 變 人選

苺摘むゾボンの膝を氣にしてゐ 耕之介

苺畑ホイとまたいで叱られる 白柳子

妹の料理苺が赤いなり 青踏

(佳) 飛行機へ苺の籠をさし上げる 踏選

席題 面 影 青 踏選

面影へ弱い心を見つけたり 大

亡き母の面影深く娘は廿歳 同

(佳) たはむれの戀初戀の人に似る 遊舟

(同) あ、グラスの面影は湧き出でぬ

(人) 面影は汗ばむ頃に逢ふたきり 白柳子

(地) 添乳と戸主に面影のこされて 溪花坊

(天) 面影の君はあまりに氣高かき 遊舟

(軸) 杯を蓄め面影に泣かんとす 青踏

兼題 レヂスター 柳 樂選

レヂスター音も嬉しい開店日 彩泡

レヂスターとウインクして別れ 昇鯉

レヂスター打ち馴れた頃玉の興 春光

レヂスター百圓札へ慌てたり 雀踊子

レヂスター特價日と云ふ音を立て 没食子

レヂスター主人がそばへ覗きに来 變人

(人) 窓からは逆光線のレヂスター 白柳子

(地) レヂスタービールの息もあつた ライト

(天) レヂスター戀を知りて娘が座り 魚水

川柳 今里句會 (大阪)

四 月 花見 市馬没食子報

花見より眼は嬉態の方を向き 遊目男

花りから歸り人生觀を代へ 没食子

花見もう車中ですますいける口 水車

上品な花見おしるこ喰べてゐる 同

(佳) 嬉しさは花見に行ける程癒り 没食子

運 山雨樓選

朝刊の運のいゝのえ寝ころがり 新市街

籤引いて運のはしくれくれるなり 没食子

運のない同志將棋を指してゐる たよち

(佳) 腕一つ運命論を否定する 水車

出 世 出 世 樂選

友人の出世祝福して寂し 遊目男

出世から友と段々遠ざかり 水車

友 情 鮎 美選

友情にすがつて歸る夜の底 たよち

友情は霞むチロアの端を持ち 新市街

もう一度友に似た名をたしかめる 遊目男

(佳) 友情に時に戀愛より強し たよち

(同) 友情に感謝する身は病んでゐる 遊目男

(軸) 友情の欠伸に嘘はなかりけり 鮎美

博覽會 水 車選

餘興だけ印象に残る博覽會 遊目男

博覽會腹もすいたし疲れたし 没食子

博覽會花火の下で五等引き 新市街

(軸) 博覽會ハシキの臭ひ鼻につき 水車

國 旗 互 選

感激の國旗破れたま、捧げ 新市街

奉祝の頭に摺れる大國旗 山月

君が代の音波に國旗揺れてゐる 没食子

歸朝今國旗の街へある涙 水車

國旗の威風凛々外人の背が低し 喜由

敵味方忘れ國旗に敬禮し 水車

日の丸を異境で拜むなつかし 喜由

川柳 簞 川句會 (出雲)

雜誌社 六月九日夜 於尼綠之助居尼綠之助報

兼題 鮎 綠之助選

父と子半分づゝの鮎をむさばれり 大朗

(人) アルジョアの食慾鮎腐つてる 好郎

(地) 鮎を焼くらし書齋の鼻にきき、 草路

(天) 飛沫は青空をもち若鮎 羅門

同 刺 戰 比佐緒選

S子と對座して 大朗

夏を弄ぶ仄かに漂ふ感覺よ

青葉に濡るゝ力のない刺戟でした

ひとりゐて刺戟が欲しい銀の雨

(人)男に酒に世に刺戟のなほ娼婦

(地)刺戟の中にほろぶお抱きつゝ

(天)刺戟とは哀し肉魂に注ぐ酒

席題 鞭 草 路選

弾む心に鞭を振り鞭を振り

友情に燃え鞭うつてくれた友

一鞭が言葉にかはるサーカス團

(人)鈍角の有つ新鮮に湧くわらひ

(地)ぐつとつまみあげた新鮮さ

(天)ころうつ青葉は新鮮な風で

同 六 月 田鶴緒選

六月は多忙である黄昏はむらさき

風は弾力を持ち六月の皮膚となる

(秀)うちら〜六月の空にいびく

(秀)六月の戀に河鹿の住める溪

川柳 今治句會(今治)

雜誌社 兼題 桐の花

五月廿九日 貯蓄銀行樓上 渡邊曉童報

牢獄へ初夏を匂はす桐の花

桐の花トタンの屋根へ重く落ち

桐の花俺に寝返りさしてくれ

桐の花孝女の草履尻切れて

蕩揚子をくわえて出れば桐の花

(秀)桐の花日傘をすいてくる匂ひ

(人)仕替する噂へ桐の花が咲き

(地)桐の花までも嫁と蛇の眼傘

(天)桐の花命日だつたのに氣付き

羅門

緑之助

田鶴緒

緑之助

羅門

路選

緑之助

比佐緒

田鶴緒

門選

好郎

羅門

大朗

緑之助

兼題 青葉

谷心府選

薬瓶青葉の蔭が伸びてくる

スポーツの汗を青葉の蔭で拭き

横顔たばこの煙はいのぼり

見抜かれないと横顔にある愁ひ

旅鴉へ母の横顔そつと見る

横顔で寫しても見る十八九

(秀)横顔へハツキリ云へ愚痴あり

(同)プロフィール靜かに祈る姿なり

兼題 蟬 曾我部宵明選

夏生れ蟬を子守にして 留ち

蟬の聲のれんの風へみんな 宵守

蟬がなく此處は餘生を送るとこ

四五日の命へ蟬はなきつりけ

病人の呼吸へ蟬のしきりなり

(住)堀越に蟬を獲る子の竿が伸び

(同)蟬の聲共同墓地を斜にぬけ

(同)夏帽の色も疲れし蟬の聲

(同)再縁の話の中の蟬の聲

兼題 偶 然 長野史郎選

偶然の事故が結んだ君と僕

偶然に合つた女の瞳を怖れ

偶然に逢ふた港の日本晴

偶然に賑やかに汽車の旅となり

偶然と云ふ顔と顔飯んでゐる

偶然の友へアカシヤ捲れてゐる

(秀)偶然に思ひ付きが入選ひ

(同)偶然に糸の切れたへ娘の愁ひ

(同)ステッキの先偶然にひつ掛り

(同)偶然と奇蹟を待つて兒が五人

席題 青葉 武田紫陽選

横顔たばこの煙はいのぼり

見抜かれないと横顔にある愁ひ

旅鴉へ母の横顔そつと見る

横顔で寫しても見る十八九

(秀)横顔へハツキリ云へ愚痴あり

(同)プロフィール靜かに祈る姿なり

史郎

都留逸

小松

紫陽

心府

心府

心府

紫陽

曉童

紫陽

健二

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

(同)横顔を見せて女の白い息 宵明

川柳 鷓鴣 町句會(大阪)

雜誌社 四月十一日 於自助會俱樂部 妹尾戀人報

物思ひ雲雀は高く飛んでゐた

物思ひ枯葉チラ〜様に散る

物思ひ人に氣付かれまいと散る

小言にならず苦笑する父

小言一つ言へぬ亭主で子が多し

父の留守母は用事があるばかり

川柳雜誌 吹揚吟社句會

今治支部 六月十六日 相互貯蓄銀行樓上 曉童報

兼題 古蹟 長野史郎選

奈良へ来て古蹟を巡る忙がしき

天守閣に立てば平和な城下町

旅行團古蹟へしばしうなだれる

古蹟の碑た見ただけで汽車の窓

古城蹟の草をぬらして月が出る

(軸)ホスターへ古蹟の華美に彩られ

兼題 逕路 渡邊曉童選

因縁を信じ逕路の強ふ生き

同行二人の笠へさみし忘れよう

金魚へ笑づるしばし去りやらず

子を負ふた逕路に道を尋れられ

逕路宿先の香ひが雨に暮れ

(軸)櫻んぼ同行二人の笠にゆれ

兼題 待つてゐた 谷心府選

事務服をきる宿命が待つてゐた

待つて居た雨苗代を青く染め

待つて居た雨苗代を青く染め

蟻の巢へしやがみこんでる待某け
(佳)待つてゝ字がはつとと揭示板
父となる
史 宵
郎 明

(同)待つてゐた日をあはてふたつ
(同)待つて居た様になき出す雨蛙
(同)待つてゐた頃を思ひ待たしと
一 風
小 樓
風 童

枇杷の雨線香いつしか消へてゐる
(佳)枇杷の色子の泣き顔へ見
(同)全快へ枇杷はすつかりと
(同)枇杷の葉の中にみつけた夏の色
(同)枇杷の實の甘き幼き頃の夢
史 心
郎 府

枇杷の葉の風佛檀をしめに立ち
春を待つ甲斐なく散りし枇杷の花
枇杷の花淋しい色に暮れて行き
枇杷の雨線香いつしか消へてゐる
一 風
一 風
一 風
一 風

俳諧黒鯉群れてもつれて午下り
泉水へ立つて二人に鯉がはれ
打あける氣をばくちがす鯉がはれ
(佳)小姑の敷たげ並ぶ鯉幟
(同)鯉幟昨日も今日も青い空
(人)繪日傘の下で大きな鯉がはれ
(地)醉眠へはつきり俳鯉浮いて
(天)考へつたといふに鯉が浮き
一 風
一 風
一 風
一 風

打あける氣をばくちがす鯉がはれ
庭の鯉時計の音がきこへて來
念佛へ鯉がびちりとはれた音
朝の光り鯉をみてゐる洗ひ髪
一 風
一 風
一 風
一 風

水面の鯉の野心となる胡蝶
(人)沈む鯉浮く鯉顔へ雨一つ
(地)鯉こくく故郷の土をなつかと
(天)糸をひく雨の愁ひへ沈む鯉
吹揚吟社五月句會(今治) (續)
五月十一日 於伊豫相互貯蓄支店樓上
一 風
一 風
一 風
一 風

兼題 ほろ酔
ほろ酔へ對岸の灯が浮いてゐる
ほろ酔へ少しく長いセル袴
ほろ酔で出るおでん屋の灯が暗い
ほろ酔のヘットライトに意地なもち
(佳)ほろ酔の頭で分けた裸錢
(同)ほろ酔の袂でなつた裸錢
(同)ほろ酔の頬に冷たき子の兩手
(軸)ほろ酔へ右と左の風が吹く
一 風
一 風
一 風
一 風

兼題 擗ぐ
火車騒ぎ怒が擗いでゐる箆笄
背が高いだけ校旗を擗いでゐる
腰折つて擗ぐ姿に出來てゐる
(佳)擗がれた籠の一ツて子が笑ひ
(同)喜りきつて籠の重きは肩に
(同)草臥れへ末の子枕擗いでき
鶴嘴を擗ぎ朝鮮忘れてゐる
(軸)モッコ擗いで影が動かす
一 風
一 風
一 風
一 風

兼題 瓜
山の乙女の瓜が伸びてゐる
(佳)瓜を伸ばして金を溜めてゐる
(同)向上の無き生活へ瓜がのび
(同)飯粒をはれるたそがれの瓜
一 風
一 風
一 風
一 風

兼題 裸
妓の裸案外太い灸のあと
裸にもなれず女の汗をふき
打水へ裸の文となつてゐる
獨り居の裸像みつめてつまらなし
草原は夏の光りて裸馬
裸像見つめて空腹知る
(軸)土段場へ裸になつて猿の戀
一 風
一 風
一 風
一 風

兼題 柳人選
六月四日夜 於平塚別館 天痴人報
兼題 胡瓜 六郎選 愛人 青波選
兼題 柳人選 國葬 天痴人報
兼題 胡瓜 六郎選 愛人 青波選
兼題 柳人選 國葬 天痴人報
兼題 胡瓜 六郎選 愛人 青波選
兼題 柳人選 國葬 天痴人報
兼題 胡瓜 六郎選 愛人 青波選

兼題 蛇の助
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて

兼題 鹿
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて

兼題 鹿
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて

兼題 鹿
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて

兼題 鹿
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて

兼題 鹿
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて

兼題 鹿
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて
初夏の風鯉をうれく躍らせて

遠足の眼が一せいに鯉幟
 國葬の今日は濁った雲ばかり
 愛人の瞳曇つて別れる日
 童心が空に躍るよ鯉幟
 鯉幟 一直線に風強し
 愛人の片意地を知る 葦狩り

天痴人居對座吟(島根・八束)

六月十二日夜

國道、ほたる、トマト

國道も景色の一つになつて晴れ
 國道のこゝで省線喰ひ違ひ
 溝があることを忘れた 葦狩
 トマトの紅さを撈ぎる日曜日
 國道へ出てどこまでも向ひ風
 葦狩さうやら蛇を踏んだらし
 トマトの紅さへビール泡を吹き

貧兒、明珠對座吟 (神戸)

六月十一日

ばらそると初夏のころを開く
 いもちの乳房みごもるちすむ
 のちからふたつめのものな
 子供等に働らく顔を見せられず
 能率を上げ同僚にいやがられ
 女子選手レヅューもとうつされる

村上源氏追悼口會

川柳雜誌社合治支部

六月十日支部同人五名、今治より海上五里

御影石の産地として有名な大島津倉に在る
 故源氏の生家を訪ひ、震前に於て大樓選一軍
 艦旗「五健選友」の代讀披講を爲し、數々の

故人の遺品、遺墨を拜見せり、生前氏が特に
 愛好せしと云ふ五葉氏の「唇へひつつけて食
 ふ花あられ」の句歿後三年の今尙居室の柱に
 残れるも淋し佛前に飾れる「沈む鯉一々泡を
 殘しとき」の短冊は署名なけれど同氏の絶句
 と思はれる、御家族の思ひ出話、故人の川柳
 生活中の逸話等聴き、丁寧な遇しを請け、又
 遺墨短冊十二葉を頂いて大掛額とし、同家
 菩提寺龜老山高龍寺に奉納し、御家族と打連
 れて墓参をなし午後二時辭去す。
 それより近き支部幹事曉童氏の 生家を訪れ
 少歿後歸今し散會せり。

軍艦旗 太平洋の雲早し
 軍艦旗から朝霧のはれて行く
 少年の夢へ輝く軍艦旗
 禮砲の煙の中の軍艦旗
 コロムビアはつきりとなり軍艦旗
 (秀)自由畫の紙一ぱいに軍艦旗
 (同)軍艦旗ゆらぎもしない麗ら
 (同)出動の風をばらんだ軍艦旗
 (同)軍艦旗双眼鏡にはらむ風
 (軸)軍艦旗海國男子此處にあり

片戀のほかに女はないのなり
 片戀をあざけるようにちぎれ雲
 垢つけて十九の青春も去らんとす
 片戀の影がおほきくゆれてゐる
 片戀に水はまはやく光るなり
 片戀の垢も三十六度二分

大石玲兒惜別句會(松江)
 朝鮮の一農園に勤務することになつた松江
 支部同人 大石玲兒(赤陽) 君の壯途を祝し一
 夜別れを惜しむ句會を莞路居に開く(柳人
 記)

席題 朝鮮 玲兒選
 裏町の一番奥が朝鮮語
 アリランを越へる希望の胸躍る
 朝鮮の夜を妓生を語り
 サラメルよ又ふるさとは凶作だ
 席題 大 卷 二選
 大きな皿に鬮が一つびき 都之介

大空の心を雲に亂すまじ 堯路
 大事に大事に一人娘の春 柳人
 席題 石 祥 月 選
 石けつて春の空氣の中にある 卷二
 石ころにふと神經のとがる日だ 玲兒
 席題 幸 都之輔選
 幸福な顔にお酒の甘い味 祥月
 幸福な男の爪が延びてゐる 卷二
 幸福の來る日を待つて十燭光 柳人

席題 青春 堯路選
 振り返る暇なき青春だつた涙 玲兒
 青春に遠く酒場の灯が赤い 卷二
 青春を捨つるに惜しきトラピスト 柳人
 川柳 梅田句會 (大阪) 鮎美報
 雜誌社 (故吉田晚春粗供養の會)
 兼題 美人 かほる選
 木の芽だちみんな美人にみゆるる 遊歩

ありつたけ着飾つて美人 出音ち
 琴を弾く美人へすゝきゆれてゐる
 教會の屋根の下なる美女ひも
 男もの編んで美人は二十一
 日本語で美人の酌をよるこべり
 (人)唐辛子ひとつ、まだ美人なり
 (地)もの思ふ美人へ金魚ひるが、
 (天)改札を出でし美人の髪のかや
 (軸)二三年此の方美人と云きて來
 鮎美 觀月 鮎美 觀月 鮎美 觀月
 同 白菊 かほる

川柳書架 (五二)

川柳叢書 第十五篇 五花村句集

永谷葉吉編

▼本書の券頭に白日莊主人大谷五花村氏の序文がある。

▼目次を轉載して見やう。灰色の雲、唄なき日、櫻咲く國、蜻蛉の目、白きエブロン、雑音の中

▼巻末に「巻尾に」と題して編者永谷葉吉氏の跋文がある。

◀昭和九年五月二十日發行。菊半截一二

○頁。頒價送費共廿四錢。京都市北白川伊織町川柳叢書刊行會發行。

▼編者永谷葉吉氏は柳誌「東北川柳」の同人であるが、本句集は「東北川柳」の主宰大谷五花村氏の句を蒐めて世に問へるもの。

川柳叢書 第十篇 溪花坊川柳隨筆

森 鷄牛子編

▼巻頭に頼原退藏氏の序が掲げられてある。

▼主要目次を抜載すると、誹風柳多留板行年表、浪華柳多留、水茶屋と萬句合取

次所、川柳評萬句合、誹風柳多留百六十七篇 序説より見た川柳の名詞、雪國春宵記、宮島柳多留と一丸、素行堂松鱸翁、地藏一題一萬句、もかみせんりう等

▼巻末には「編して」と題して編者森鷄牛子氏の編輯言が掲げられてある。

▼昭和九年二月廿五日發行。菊半截一二

▼本田溪花坊氏は柳樽第百六十七篇の所藏者として人の知るところ、編者は柳誌

「三味草」の發行者森鷄牛子氏である。

▼六月の下旬もう海に飛び込みたいほどの暑さだ。前號の好評に勢を得炎熱と闘つて本號を編輯した。

▼来る八月特輯號は素晴らしい清新味を盛りた思いつてゐるが既に集つた寄稿中にも珍らしい顔振れがあり、色々の計畫も進めてゐるので銷夏的好伴侶としてデビエーするであらう。御期待を願ひたい。

▼本號の表紙は食満南北氏の染筆になるもので、同氏の蠟燭の畫には畫家の間にも定評がある。味つて頂きたい。▼青森の不浪人氏から「股引を送る」を寄せられた。これは同人萬よし老が大阪市議として北海道へ視察旅行に出かけた際のエピソードで、最修、不浪人、萬よし諸氏の面目躍如たるものがある。

▼月評は艸樂居で、新水、艸樂兩氏と僕とが集つた。當分は斯うした形式で合評を續けたい。

▼石曾根民郎君の「人魚回春」は斯う云ふ方面の研究に熱心な同君の文獻的考證と夢とが興味をそよめる。

▼亂耽君の「東京の聲音」は「江戸のうはさ」が復活したもの。うれしい便りとニュースが集つてゐる。

▼六月二十四日午後七時半から大阪中央放送局第二放送から川柳披露と合評の放送があつた。番傘川柳社から水府、雲雀、小太郎、舟人、夢路、文久の諸氏本社から路郎主幹、艸樂、亂耽、新水、豆秋の諸君と僕とが出た先づ路郎先生から「人情味の句に就て」のお話があり續いて先生の選句「辭職」の披露を僕がする。次に水府氏から「凡ての人の文藝——川柳」のお話並にその選句「口紅」の披露を文久氏がせられた。之を終つて路郎先生が「リダーの下に「都會風景」の句に就き合評を試み、最後に水府氏のリダーで對照吟批評（五

題）が交換され、正九時に終つた。

各方面から讀辭や、感想が來てゐるが、近年にない試みであつたので社會に對し川柳の關心を喚起し、相當の反響を與へたことは欣びに堪えない。

▼六月十三日日本橋俱樂部で「綠雨氏令閨追悼句會」が開かれた。當夜は溪花坊、ひろし、素人、鶴足、琴人氏等の近頃珍らしい顔觸れも揃ひ、しんみりした會であつた。綠雨兄の挨拶の後で路郎主幹から「外喜さんを憶ふ」と題するお話があり、溪花坊、ひろし兩氏からも感想をのべられた。

○▼番傘の編輯者たる永先才十氏が、同誌六月號に「第二の仕事」七月號に「柳誌の魅力」と題し編輯の仕事に對し意見と抱負を述べてゐられる。僕も「川柳雜誌」の編輯に携はつてゐるので多大の關心と興味を以つて讀んだ。そこで多少の感想と僕としての意見とを述べて見たい。

▼先づ川柳家以外の人々にも買つて貰へる雜誌」と云ふことと就てであるが、無論賛成である。僕等も川柳の雜誌が川柳家は勿論川柳家以外に一人でも澤山の人に買つて讀んで貰ひたいことは夢寐の間も忘れては居ない。しかしこれらが現實の問題になつてくると仲々簡単にゆくものではない。恐らく將來益々この問題は困難の度を加へることと思ふ。

▼相當教養があり新智識、新思想、新趣味の吸收に心向けてゐるものにとつては、「文藝春秋」「中央公論」「改造」「經濟往來」「新潮」「文藝」「週刊朝日」「サンデー毎日」等々の花形雜誌が食後の果物のやうな新鮮味をもつてその寵招に應じてゐる。大新聞の必讀性は副食物の位置にある。一般人は何を好んで柳誌に食指を動かすのか。

▼柳誌の商品價値は川柳家以外に對し餘りに貧しい。恰度公設市場で魚釣の道具を賣るやうなものだ。安いから買つておかうと云ふ心裡は、必要といふ潜在意識に手招きされるからである。買ふと云ふ行為は所有慾の表はれである従つて飾り誇り有る何等かの對照であることを豫期してゐる

▼幸ひなことに有望な販路が、只一つだけ残つてゐる。それは川柳家をふやすことだ。川柳家をふやして柳誌を川柳家に求めて貰ふことだ。これは仲々困難であるが、見込みのあることだ。現実の問題としてはこんなところに落着くのが山であらう。

▼しかし僕はこの川柳家をふやすことゝ、ふえた川柳家に柳誌を買つて貰ふことを、川柳家以外の人々にも買つて貰へる雑誌にする以上、重要視してゐる。柳人にさへ飽かれる柳誌が何で柳人意外に好かれやうか。極く特殊な例外のあることは言ふ迄もない。端的に云へば柳誌は川柳自體の爲めに存在するものであり、従つて川柳家のものである。その一步を出るとしても、川柳家をふやす爲めのものであると云ふに過ぎない。

▼ところで僕が以上の考えとおよそ對蹠的な行ひを、その編輯工作に捧げてゐることについて付言しておきたい。それは柳誌を内容的、實質的によくする爲めには柳壇以外の文壇を展望し比較する必要が益々必要になつてくるからである。と云ふのは川柳家のレベルが向上しつゝあ

る以上に文壇人のレベルが昂まりつゝあるから、川柳は川柳界のみに超然として蟠居することを許さぬのである。川柳家以外

するのだ」と云ふ自負と信念と野望とに膽ツ玉を据えて、不斷闘ひたいと思つてゐるが、柳誌は、賣る雑誌にすべきだと云ふ

はされ乍ら、一面川柳の普及の爲め、開拓の爲め、向上の爲め川柳それ自身の爲めに買はれるべき雑誌を編輯し企畫しなけれ

川柳 十二月日會生

毎十二月日午後から
於玉出・キゲン喫茶店

川柳の仕事は勿論、川柳以外 御用事にもお忙がしい路郎先生にゆつくり柳談其の他をお伺ひする機會を作つて頂きたいことは、われ／＼年來の要望でありました。それが漸く實現されて茲に「二十日會」が生れました。即ち先生をつかまへる會であります。左記に依り廣くこの會を利用せられんことを祈ります。

▽日時は毎月二十日午後から夜にかけて。

▽場所は南海本線玉出驛西約三丁、キゲン喫茶店。

▽路郎先生には二十日會の爲めに當日繰合せて御宅に居て頂きます。

▽大阪市西成區玉出本通三丁目三六、麻生路郎先生宅。

▽葎乃奥様は無論出席して下さい。

▽ごなたでも参加出来ます。會費の定めも別段ありません。

▽話題は川柳に限らず、先生を中心に色々の懇談を重ね、又は各自専門の話や座談會も開きます。

昭和九年七月一日

發起人 (いろは順)
橋本 縁雨、村松 夢裡、奥野 禿山、近藤 勇
吉田 水車、北川あや美、水谷 鮎美、姫田 夕鐘
日野 華水、妹尾 嬋人、須崎 豆秋、生田 翠夢
春元 紀太、西田 紳樂、高橋かほる、永田里十九
山本 丹路、朝田 新水、福田山雨樓、福田 鶴峯
關本 雅幽、住田 亂取

の批判の眼をおそれるからである。そして、川柳は川柳家がよく

商業意識に培はれてゐるのに反し川柳家以外の人々からは購はれ難いといふ苛酷な負債を背負うばならぬところに断ち難き相起がある。柳誌を出す事は正に不動明王の仕事だ。

▼六月二十三日の午後、京城の「川柳四温」の同人津田麗月冠氏が、商用で東京へ旅行の歸途來訪されたので、路郎主幹と共に心齋橋筋喜久屋北店で、しみじみ川柳を語つた。同氏の明敏と熱意に對し多大の期待と敬意を表するものである。

前號正誤

七頁 梯子段小僧は二段づゝの
ぼり 靈子

一頁 アルプスの雪が孕んで
來る寒さ 義風子

一二頁 本人のためと落弟させ
られる とし

四〇頁 月曜日隣の爪が飛んで
來る 山雨樓

四一頁 いたづらな詠嘆はよせ
團子鼻 綠之助

六四頁 おやそうですかと妾宅
旗を出し 珍茶坊

尙課懸吟藁集の所で七月五日、
切の團扇、前田五健選、涼臺、

平岩司郎、市場没食子共選は何
れも誤植に付本號掲載の分に依

り更めて投句を願ひたい。一切
も七月十日頃まで延期すること

とした。選者及投句諸兄に深く
お詫びする次第である。

Nishincho MEMO

▼西田紳樂君
は本社編輯局
同人として活
躍されること
になりました
▼藤里好古君
は六月十五日
伊豆御神火の
嶋から便りを
寄せられました

た。

▼庄萬よし君は大阪市會議員と
して函館方面へ視察に行かれま

した途中六月十日青森の不浪人
氏、十一日函館の辰修氏に會ひ

十三日湯川温泉に清遊、十四日
夜福島縣白河で能因會の五花村

葉吉、泰山、喜四雄の諸君と會
つて十八日歸阪されました

▼永田里十九君六月七日屋島、
栗林公園とを巡つて歸へられま

した。

▼西田紳樂君は六月十日奈良で
萬葉植物園を見物されて大變文

學的に得る處が多かつたそうで
す。

▼加藤文醉君六月十一日日出度
く女子出産和子と命名されまし

▼吉川啞人君は六月十六日商用
で來阪されて私の勤務先でお目
にかつたが約五分間位の話で
急いで歸られました。

▼奥野禿山君は、六月七日伊勢
參宮されました。

▼竹内機見女さんは、六月三日
叡山へ登られましたか、山頂で
嵐にあつて進退きはまつたそ
うです。

▼六角桂風君は、浪速區大國町
五丁目、今宮中學校前大通南西
側で支那料理店を開店されまし
た。大いに發展を祈ります。

▼楊井二南君は、編輯同人とし
て活躍されておましたが家事部
合で退社されることになりました
た、一日も早く復活を祈ります

▼福田鶴峰君は、天王寺支部の
幹事と本社同人(理事)とを兼ね
ておりましたが支部幹事は舊
の須崎豆秋君と交替されること
になり、本社社議員同人に變更
されました。

▼白井梅里君は、豊橋支部の幹
事として多年活躍されましたが
石効なく左の辭世句を残して
六月二日午後十時に永眠されま

▼螢ヶ池支部の石森靜太君は脚
氣のため支部幹事を三谷梨風君
と交替されます。

▼西村明珠君は病臥して居られ
ます、一日も早く御全快を祈り
ます。

▼福田鶴峰君令妹は、病氣で自
宅療養されておられます。一日
も早く御全快を祈ります。

▼本號の編輯は山雨樓、春光、
與三郎、機川女の諸君と私とで
致しました。(綠雨)

轉居

▼奥野禿山君は(大阪市住吉區
住吉町一六四へ)

▼平井與三郎君は(大阪市大正
區大正通六ノ九二へ)

▼道田葉平君は(大阪市旭區放
出町二四八へ)

▼菊澤小松園君は(大阪市西區
阿波座上通一ノ二〇へ)

▼六角桂風君は(大阪市浪速區
大國町五丁目へ)

▼武田北人君は(大阪市北區曾
根崎上一丁目七三へ)

改號

▼平井冬呼君は與三郎
地黃たてみち君は天國と改號

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人に限る。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に詰める事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募 集

第十一卷第九號課題

七月十日締切

(各題十句以内)

▼代理

前田 五 健選

▼巡禮

平岩 司 郎 共選
市場 没食子

第十一卷第十號課題

八月五日締切

(各題十句以内)

▼占ひ

麻生 葭 乃選

▼綱引

橋本 綠 雨選

▼每號募集

▼近作柳樽

麻生 路 郎選

▼各地柳壇

(會報)

▼文章

(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定 價

一 部 金參拾錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

廣 告

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にも頂ける様に願ひます、但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和九年六月廿五日印刷

昭和九年七月一日發行

第十一卷 第七號

(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 一郎
發行所 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
電話天下茶屋二五七九番

川柳雜誌社

大阪市住吉區平野西之町八三番地

振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一六六七番

無 斷
禁 載

賣捌書店
(大阪) 大賣捌二盛社書店 (明文堂 其他 市内各書店)
(東京仲見世) 玉森堂 (神戸) 米田、寶文館 (函館) 石塚
(京都) 三宅 (名古屋) 靜觀堂

川柳雜誌案内

六號活字十四字三行金五十錢、一行増すこ
ごに金十錢、但し前号の切手代用可、その他
改題、移題、句會案内、繪卷廣告、その他

製並合本特賣

「川柳雜誌」の合本第二巻
より十巻まで

各壹巻 金壹圓五十錢
大阪市内送料 壹冊 六錢
市外送料 壹冊 廿四錢

大阪市住吉區平野西之町八三
申込所 川柳雜誌社

懸賞川柳募集

題「螢」路郎 選
七月十日締切
その他雜吟を券る

▼用紙 宣製ハガキ（化粧柳
壇と明記の事）

▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛

化粧新聞社

川柳きやり

菊判每號七十數頁

毎月一日發行一部廿五錢
東京淺草區小島町二の二七

川柳きやり吟社
（取次所）川柳雜誌社事務所

蒐集

▼新聞、雜誌（川柳の雜）に
掲載ある川柳に關する記
事の切抜

▼川柳家の集合寫眞、個人
寫眞

▼川柳の短冊、色紙
右品で不要なものあれば御
贈與下さい

大阪市住吉區平野西之町八三
橋本 線 雨

短冊頒布

筆者 麻生路郎先生
上短冊一葉金參圓 送費不要
作品は入金順に發送、振替は
大阪七五〇五〇一を利用され
し（句の希望の方はお知らせ下
さい）

申込 大阪市住吉區平野西之町
八三番地

所 川柳雜誌社事務所内、
短冊頒布係

川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋は左の價額
でお頒ち致します。なるべく此
用箋を御使用下さい。

五〇枚綴二冊 價金拾二錢
（送料共）

▼御申込は本社事務所宛
（一錢切手代用可）

暑中見舞の

廣告を募る

川柳家の名簿と柳友交誼の爲是非一口御申込下さい。
幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓。一口分
の原稿はなるべく簡單に願ひます。

◆申込期限七月十二日迄（八月號）
（八月號）
大阪市住吉區平野西之町八三

川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一六六番

暑中御見舞

色紙、短冊の御用は

大阪市東區安土町堺筋西

川柳雜誌社指定

書畫用品商
風流雅品商
和正堂

電話 本町二一六番
振替大阪九一七五番

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本

いさ下用愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全

冷凍かこい



絶對防腐劑なし



特價

七^ダ分瓶詰 (三合九勺入) 金八拾錢也
三^ダ分瓶詰 (二合七勺入) 金四拾錢也

素敵にうまい

夏のお酒 ● ● ●

發賣元

嘉納合名會社

北直賣部

大阪市東區横堀三丁目

南直賣部

大阪市南區大和町一番地

神戶支店

神戸市神戶區元町七丁目

灘の銘酒 白鶴が、獨特の科學的研究を基礎として、低温後熟醱酵を完全に行はせ醸造せる「冷凍ハクツル」は、輕くて滋味ゆたか、芳醇涼味溢れ、保健と衛生との條件を完備した、理想的な「夏のお酒」であります。

召ませ!

氷の様に冷い

ッ冷凍ハクツルを!!

盛夏綠蔭に在るが如き爽かな酔心地は冷凍ハクツルから: